母の形見を捨てるまで…feat.それから。

目次

～母のふるさと～

１ 無垢なるドッキリ
２ 笑顔と泣き顔
３ 仕事熱心
４ 白い靴
５ 園長先生
６ 島暮らし
７ ランドセルの夢
８ 呑気者
９ くみ子姉ちゃん
１０ そこつ者
１１ プロの技
１２ おんぶ
１３ 負けず嫌い
１４ アカデミック

～母と過ごす～

１５ 感服
１６ 川岸の花

17 鈴と涙
18 跡継ぎ
19 お茶漬けの味
20 良い演奏
21 女優さん
22 母と自転車と私
23 はだかんぼうのヒーロー
24 サイフォンの原理
25 金の指輪
26 笹の葉
27 ぼくとつ
28 何の涙？
29 伏線と回収

～母を見送る～

30 重いテーマ
31 ひねくれ者
32 泣き言
33 華族
34 弾ける花
35 孫からのプレゼント
36 母の形見
37 お料理の腕前
38 三人の外孫

３９ リングを捨てた夜
４０ 指輪が増えた日

あとがき

～母のふるさと～

１無垢なるドッキリ

子供の頃は、毎年夏休みになると母のお里に帰省した。

父は建設会社でビルを建てる現場の監督をしていたから夏休みなど取れる訳もないので、いつも母と私と妹の三人で出かけ、だいたい一週間かもう少しくらい、母の実家に泊まって過ごしていた。

母のお里は、瀬戸内海に小さな島々が連なって浮かんでいるうちのひとつで、当時は本土の街からフェリー船に乗って小一時間かけて移動していた。

島の小さな桟橋に着岸すると、一緒に乗船していた数台の自動車が勢いよくスロープを渡って次々と下船するのを見ながら、島の独特の空気をおっかなびっくり吸って、母に着いてトコトコ歩いて降りていた。

自動車の進行を妨げない様に、フェリーの乗船客用のスペースは、縦一列に並んで進まないと降りられない程狭くなっていた。

母と手を繋いでいる事が難しく、一人で母の背中を懸命に追いかけて行くのだが、桟橋のたもとにぽっかりと、深い緑色をたたえた

海水が見えている所があって、足元の近くでユラユラ波立っていて、何かの拍子に吸い込まれて落ちてしまう様な気がしていた。

私にとっては、島に上陸するための一大関門であった。

妹が産まれる前は、母と私の二人旅だった。

私が3歳か4歳頃だっただろうか、実家の前の道に到着した途端、母がドッキリを仕掛けた事があった。

母の実家は『大田商店』と言って、日用品から駄菓子や花火までなんでも置いてある雑貨屋さんだった。

商店と言っても、商店街の一角とかにあるお店では無く、周辺はみかん畑と民家に囲まれた場所で、店の真ん前には道路一本を隔てて、瀬戸内の海が迫っていた。

商店を営む祖父母も、お店のすぐ後ろの上り坂沿いに、みかん畑を持っていた。

島は山から海辺までの距離が短く、海を背にすると、上のお寺さんの方までずっと、みかん畑の間を縫う様にして坂が続いているのが見て取れた。

さて、母のドッキリである。それはまだいたいけな幼い娘を小道具に使った作戦であるらしかった。

「『くださいな。』って言うんよ。」と母は言った。私を一人で大田商店の店先に向かわせ、買い物客と見せかけて、果たして店番のおばあちゃんが孫と見抜けるだろうか、という内容の物であったのだ。

従順な子供だった私は、言われた通りの行動をした。真夏の道路の照り返しで眩しい世界から、おずおずと薄暗い店内に入った時の心細く謎めいた感覚は、いつでも思い出せる。

「ハイいらっしゃい。」おばあちゃんはいつもの様に歌うように言ったのだろうが、そこは覚えていない。

次になんと言うのか母から教えて貰っていなかった私が押し黙っていると、祖母がハッとした様に私の帽子のつばを持ち上げた。

「珠ちゃん？あんた珠ちゃんやろ。」

気付いてくれて、ホッとしたやら安心したやら。どうして突然こんな理不尽な緊張を強いられなければならなかったんだろうと幼心に思っていたはずだ。

祖母は店の外に目をやり娘を探し、我が母は電柱の陰から飛び出してきた。

華やかな笑いに包まれた二人の顔を見上げて、私も緊張がやっとほぐれて、一緒に嬉しい気持ちになっていた。

2笑顔と泣き顔

「男はつらいよ」の映画を見ていると、家族といざこざがあってへそを曲げた寅さんが、いつもと違う階段を上って二階に行く場面がよく出てくる。

母のお里の家にも同じ様な感じに、いつもは使わないもう一つの階段があった。

みんながご飯を食べたりおしゃべりしたりする居間のすぐ横にある階段は開放的で、住人である三人のいとこ達は、二階の自室に行く時にはいつもこちらの階段を使っていた。

一方、お店の売り場からひょいと一段上がった部屋は祖父母の居室で、常に障子が開け放されていて買い物客に対応できる様になっていた。

その部屋の奥に、廊下が突き当たって途切れ、左を見上げるとやや暗い階段があるという事に気付いたのは、あんなに毎年行っていたのに結構大きくなってからだった。

小学生になっていた私は、慌てて母に報告をしに行った。「向こうに階段がもう一個あるよ。」

母も、周りにいた人達ももちろん知っていた訳なので、知らなかった私の方が笑われてしまった。

そしていつもの様にべそをかくのだった。

私は本当に泣き虫だった。

女の子のいとこたちがある時、プラスチックでできた可愛い口紅のおもちゃを持って遊んでいた。その赤い色と言い、小さなサイズ感と言い、こんな可愛いおもちゃは見た事がない！　帰省した当日くらいの出来事で、一年ぶりに会ういとこ達とまだ馴染んでいなかったのだが、思わず「貸して。」と言ってしまったのだ。

引っ込み思案の私にしては無謀な行動であった。果たしていとこ達は「だめ。」と言う。するとこちらも意地になって「貸して。」としつこくする。おもちゃが手に入らない悔しさで、ものの三分も経たないうちにべそをかき始める。

いとこ達は、口紅のおもちゃをポーンと床に投げ捨て、「すーぐ泣くんじゃけ！」と捨て台詞をして連れ立って走って行ってしまった。

べそをかきながら、転がっている口紅のおもちゃを拾ってプラスチックの感触を指で確かめた時は、嬉しかった。

不思議なのは、母親ベッタリの私が、今しがた起こった出来事をその時母に言いつけに行かなかった事だ。

実家での母は、鎌倉での母とは別人の様だった。

いつも楽しそうに笑ってニコニコしていた。その笑顔が珍しくて遠目にしげしげと眺めていると、視線に気付いた母は私を見て、何故かうんうんと頷いていた。

泣き虫の私がようやくいとこ達との生活にも馴染んだ頃、鎌倉に帰る日がやってくる。祖父母と同居していた年雄伯父ちゃんや和子伯母ちゃんに挨拶をする時が、その年の帰省での泣き納めとなる。

威勢の良い夫婦で、二人とも声が大きかった。

「珠代っちゃんよう。」伯父ちゃんが毎年同じフレーズを口にする時点で、怖くて涙が出てくる。「もうビービービービー言わん様になったら来いのう。」広島弁が怖くて、毎回ビービー泣きながら帰っていた。

みんなは笑っていたけれど、母はどんな気持ちだったのだろうと、今は思う。

3仕事熱心

子育てをしている時は、いつも子供の泣き声にはおびやかされていた。

一旦泣き声に注意を持っていかれると心がかき乱される事この上ない。

そのため私は、仕事熱心な子供だ、と感心して尊敬の念を持って泣き声と付き合う事にしていた。

子供は泣くのが仕事。思う存分仕事に精を出した後はケロッとして子供自身で場面転換をしていた。

学童保育の保護者会の時だったか、会合が終わって私がお茶の後片付けを手伝っていたところ、末の子が泣いていたと言われた事があった。

「ママーと言って泣いていたのよ。」と不在を咎められたが、当の末っ子は既に問題解決してケロッと泣き止んだ後だった。

切り替えも鮮やかに、大人たちの不穏な空気をつゆほども感じていない様だった。

詰まるところ、そもそも子供は親に何かしてもらう目的で泣くのではないのではなかろうか。

反面、一体どこにスイッチがあるというのか、一度泣き出したら一時間でも二時間でも泣いている子だったと、よく母に言われた。

狭いアパートの部屋で、めそめそメソメソいつまでも泣き続ける娘と一緒に過ごさなければならないとなると、母も大変だったろうと思う。

五歳違いの妹が産まれれば尚更、上の子をかまってやる余裕はなくなっていただろう。

そんな訳で、妹の出現によって私の泣き虫ぶりは大いに加速した。

それ以前は、泣きに入っても多分頃合いを見て母が部屋の外へ連れ出して気分を変えさせていたりしたのだろうと見られ、泣き止んで不貞腐れた顔で写っている写真がアルバムに貼ってあったりする。

しかし、母は乳児の世話に明け暮れる様になった訳だ。

泣いているうちに、何が悲しいのかわからなくなるのだが、泣いているという行動自体が悲しみを増幅させて、雪だるま式に悲しみだけが大きく膨らんでいった。

困惑した様な呆れた様なあざける様な表情でこちらを見ていた母と目が合う。

無力感に憑かれた様な表情だった。それから母は布団の上で私の手足をさすってくれるのが常であった。

一時間も二時間もしゃくりあげて泣いていると、両手両足の先が痺れて感覚がなくなって来るのだ。

さすって貰いながらも依然として泣いてはいたが、血行が戻って気持ちが良くなって来て、そのうち眠りに就いていたのだろう。

母の魔法の手にかかるまでのメソメソタイムで、一度派手に父に怒られた事があった。

父はお風呂上がりだったか、三面鏡に向かってどっかとあぐらをかいて座り、頭にヘアトニックか何かを撫で付けていた。

「うるさい！黙らせろ！」父の声で飛び上がると、鏡越しに父の険しい顔が見えた。

黙るどころか一層泣き声に火が付いた。見かねた母が手を差し出してくれたのは有難かった。

そんな、非常に仕事熱心な子供であったのだが、勤勉な子供を持った親の苦労は相当な物であった事だろう。

赤ちゃんの妹はすくすく育ち、妹のいる暮らしに慣れて来るに連れ、泣き虫も少しずつ退散して行った。

「あんたは外で遊んで来なさい。」と授乳中の母に言われても、メソメソしないでさっさと遊びに出かける長女くらいには進化していた。

泣くことによる脅しは、もはや通用しないと悲しくも悟った瞬間だったのかも知れない。

４白い靴

母が私の妹を産んだ時、私は5歳になっていたのだが、母のお腹が大きかったとか、お腹が重そうで大変そうだったとかいう記憶が全く無い。

鎌倉の小さいアパートで、企業戦士だった父の遅い帰宅を待ちながら、泣き疲れた娘の手足をさするだけが母のルーチンではなかったはずだが、子供は自分本位なもので、自分の方を向いている母親の顔しか覚えていないという事なのかも知れない。

ほぼ母娘二人でつましく暮らしているうちにも、臨月は巡ってくる。

母は、第二子を出産するにあたり、長子を産む時と同じ様に、里帰りをした。

ただ、長子の時はお里の家の座敷でお産婆さんに取り上げてもらったのが、第二子の時は、お里の島の隣の大きな島に建った総合病院での出産となった。

幼稚園をお休みして、長子の私も母の里帰り出産期間は瀬戸内の母のお里で暮らした。

兄弟姉妹が集まる盆暮れに里帰りする時の母は、それは楽しそうで生き生きとして、子供の目から見ても若返った様に見えて、鎌倉のアパートにいる時の様には甘えられない雰囲気だったが、盆暮れでもない普通の日々の母のお里の家には、祖父母と伯父夫婦が静かに生活していた。

いとこ達も、通常運転で毎日登校しているし、毎年繰り広げられていた喧嘩合戦もおのずと休戦状態となった風だった。

いよいよお産が近付いて入院、となるまでは、私も母のそばで静かに過ごしていたのだろう。

だが、私が寂しさに耐えきれずに暴発するまで、そう長くはかからなかった。

つまり母は順調に産気づいて、入院したのだった。

ある日、母の代わりに祖母が私にピッタリくっ付いて来ていたのだ。

「なんでおばあちゃんが来るの？ママはどこ？」と素直に聞けない子供だった。どこか、本当の事を知るのが怖いから、逃げている様な所があった。

祖母は多分、私の母の入院の事を伝えてくれたはずだが、私は、聞いても理解する事を本能的に拒んだのだろうと思う。

祖母は、絶望にくれる孫の機嫌を取ろうとしたのか、私を島の商店街に連れて行ってくれた。

商店街の通りを祖母と手をつないで歩くと、たくさんのお店が並んで色々な物を売っていて、なるほど目先の気分は変わった。

小さい子供の目線をちょうどキャッチする様な、巧妙なディスプレイのお店の前で私の足がピタリと止まった。

「これ買って。」

「靴買うんね？履いてきたのがあろう。」

「この靴がいい！」

可愛らしいデザインの、オシャレ靴に目を奪われたのだ。

母だったら絶対に買ってくれないカテゴリーの品だ。

汚れても洗えない。幼稚園に行く時に履かせられない。すぐ小さくなって入らなくなる。下駄箱の肥やしになるだけ。

「これ買うたらもう泣かんのね？」

「うん。」

買ってもらった靴の包みは祖母が持ってくれた。

私は、ありがとうぐらい言ったのだろうか？

言っていないと思う。

島の商店街は、にぎやかで華やかであったが、子供の足でも20分も歩けば通り抜けてしまう程度の規模であった。

祖母は、用事や買い物をする事もなく、ただ私の機嫌を直すためだけに連れて行ってくれたのだった。

もうすぐ商店街の端っこに差し掛かる、まさにその時、雷に打たれた様に、あるお店の前で釘付けになった。

私の目に、さっきのよりちょっと可愛い靴が飛び込んできたのである。

さっきのより、こっちの方が清楚で上品でオシャレできれいな色に見えて仕方が無い。絶対に気のせいなんかじゃ無い！

「これ買って。」

「へ？珠ちゃん何言おんね。今買うたばっかりやろ。」

祖母は、靴の包みを私に示し、驚きを隠せずすっとんきょうな声を上げた。

「これも買って！これも欲しいの！」

「あんた、おんなじようなもんふた一つも買うてどうするん？」

「同じじゃないの！白いのが良いの！」

こっちの靴は、白い色が似合う本当に清楚な可愛い靴だった。

しばらく靴屋さんの前で押し問答をして、祖母もあの手この手で気をそらそうと試したに違いない。

でも孫の泣き声が次第に大きく響き始め、人々の視線を感じ始めると、白旗を挙げざるを得なかったと見える。

「もう明日はこがに買わんからね。今日だけよ。」

祖母は、(どして二つもおんなじ様な靴屋があるんじゃろか。)と苦々しく支払いを済ませたのだろうか。

真新しい、非実用的なお嬢ちゃま靴の包みを二つも抱えて孫の手を引いて、(やれの～。早いことみっちゃんが退院して来にゃ、えらいこっちゃ。)

と、冷や汗でも拭っていただろうか。

泣き止んだ私は、祖母と一緒に帰って来ると、大田商店の上がりがまちに、買ってもらった可愛い靴を二つ並べてご満悦であった。

夕食の席で、祖母がみんなに今日の出来事を報告して、「二足も買わされたんで～。」と笑いながら身振り手振りで話しているのを、(おばあちゃん、ママみたいだな…)と、再発見した様な気分になって見ていた私であった。

5園長先生

「珠ちゃん、おばちゃんと一緒に幼稚園行こうやー。」

母のお里がある島の隣の島に、桂子おばは嫁いでいた。リアル瀬戸の花嫁である。

若いうちから幼稚園の園長さんとして、バリバリ働いていた。

母は、産後の静養期間をお里で過ごした後、隣り島に居を構えていた実の姉の所にしばし厄介になった様だった。

母と再会して安心したものの、赤ん坊という新参者に戸惑っていたと思われる私に、ある朝、桂子おばが唐突に提案して来たのだ。

鎌倉の幼稚園をせっかくお休みして来てるのに、まさかおばちゃんちで、幼稚園ていう言葉を聞くとは思わなかった。

寝起きでもあり、訳が分からずキョトンとしていた私に、快活なおばがたたみかける。

「お友達がようけおるんよ。一緒に遊んだらええよ。おばちゃんも一緒に行くんじゃけ、怖いことないんよ。」

そのおばちゃんが一緒だから怖いんだよ。と私の頭の中は大混乱を来たしていた。

幼児教育に携わり、幼児の心理に詳しかった桂子おばはやはり、母親ベッタリな私の様子に胸騒ぎがしたのであろう。

「なんかさせにゃいけんよ。一日中ボ～っとさしてたらつまらんで。」

と、母にもハッパをかけていた。

二人の子供を育てながら、園長先生もやっていて、バイタリティ溢れるおばは、当時の私にとっては脅威でしかなかった。

多分、桂子おばにとっても案の定、その朝私が首を縦に振る事はなかった。

呆れ顔で出勤していくおばの横顔は今でも思い出せる。余程ホッとしながら見ていたのだろう。

おばの危惧する通り、産後の母のそばで、私は一日中ボ～っとして過ごしていたのだろう。

つくづく歯がゆい存在の姪っ子だったろうなあ、と思っている。

6島暮らし

母のお里の大田商店には、道路一本隔ててすぐそこに、ポチャポチャと瀬戸内の穏やかな波音を奏でる海が迫っていた。

今でこそ、しまなみ海道となって道路も整備されてしまっているが、当時はもっと狭い道だった。

道を横切って来るのであろう、小さなイソガニを、家の周辺でもよく見かけた。

二階建ての家だったが、用を足す時は、一階の中庭にある小さな別棟の佇まいを呈するポッチャントイレに、つっかけを履いて行かなければならない。

大人用のサイズのつっかけに足を引っ掛けて、よたよたしながらポッチャントイレに向かう途中、転ばない様に足元を見ながら歩いていると、チョロチョロ動く物を見つける。そうなるとトイレは二の次で、その場にしゃがみこみ、敷石の上から器用に地面に伝い降りていくイソガニの観察に夢中になり、順番待ちの声にも気が付かないくらい没頭していたものだ。

海に浮かぶ小さな島。そこに掘られた井戸の水を、母のお里では皆が飲んでいた。

口に含むと、海水を真水で薄めた様な味がして、私はとてもじゃないけど、飲む事どころか匂いも苦手だった。ミネラルをたっぷり含んでいたのだと思うが、どうにも塩っからそうな匂いがしていて飲む気にならない。おばあちゃんに麦茶を沸かしてもらわないと水分補給が出来なかった。

砂浜ではなくて、大きめの砂利がゴロゴロ転がっている浜だった。引き潮の時にイソガニを見に浜に降りようものなら、足の裏が痛くて痛くて、悲鳴を上げる位だった。

カニの捜索の合間に顔を上げて海を見やると、近くには造船所が物々しく構えてあったっけ。

毎日の満潮の時刻を書いた一覧表が、家の出入口の壁に貼ってあって、いとこ達がそれを見てさんざめくのが毎夏の風物詩だった。

張り紙に書かれた時刻に合わせ、子供達は各々海水着に着替えて、自分の名前が書かれた木札をめいめい持って、海に向かって突進して行った。

道路端に木札をキチンと並べて置いたかと思うと、ボチャンバチャンと海に飛び込んで行く。

見張り役の大人は日替わりの当番制で、慌てて麦わら帽子を被りながら駆けつけて来ていたのを思い出す。

80m 程沖に、飛び込み台があって、子供達は競ってそこまで泳いで行き、盛んに飛び込み合戦をしていた。

毎夏の事とは言え、地元の子達には敵わない。私はいつも、心配症の母から浮き輪を与えられ、浜付近でポチャポチャ浮いて十分満足していた。

一日たくさん身体を使って疲れた頃、二階の海側の広い座敷に敷き詰められた薄い敷布団に雑魚寝をする。

いとこ達も、普段の自分の寝床ではなく、雑魚寝に参加していた。

開け放たれた窓の外から、昼間よりも少し濃いめの潮の香りが漂い、ポチャポチャ、パシャン、と波の音が間近に聴こえる。

非日常、夢の暮らし。文字通りに夢心地でウトウトすると、そよそよと気持ちの良い潮風が。

ふと目を開けると、千春ちゃんのお母さんがうちわを手に横座りをして、寝そべる子供達に満遍なく優しい風を送ってくれていた。

(ママは来ないのかな…)と思いつつ、夢の中へ。

うちわ係も、当番制だったのかも知れない。

7ランドセルの夢

鎌倉の小さなアパートに住んでいた頃、私が幼稚園の年長さんの冬を迎えた時だったか、母に、行き付けない場所に連れて行かれた事がある。

割と毎週の様に、休日には家族で横浜に繰り出し、高島屋デパートでウインドウショッピングをした後、地下街でクラチの焼きそばを食べて帰る事が多かったから、おそらくその際に見繕ってくれたのだろう、「かっこいいお洋服買おうね。」と母が張り切って私のブラウスとスカートを選んでくれたのを朧気ながら覚えている。

何故、朧気ながらなのかと言えば、気分が乗らなかったのである。襟付きのきっちりした真白いブラウスは、よそよそしい感じがして馴

染めないし、合わせる紺の吊りスカートは、ひだがいっぱい付いてはき慣れないし可愛くない。

買ってと言った覚えはないのにどうして買ってくれるんだろう、と不思議だったが、いつも母親に対してしていた様に、嬉しい素振りを無難に見せていた。

普段着に着る代物でもなし、ハンガーにかかったそれらを見ているだけだったが、ある日おもむろに袖を通す事を強いられた。

気心地に慣れずモゾモゾしている私は、次に、初めて会う大人の前に座らされた。

目の前にはテーブルがあり、テーブル越しに、知らない大人が立つか座るかして、何やら色の付いた紙や鉛筆を出して、意味不明な事を私に言った。

テーブルの上で、何色かある様々な形の積み木を動かすという様な話だったが、初めて行く場所で初めて会う人に意味不明な事を言われ、どれをどうしろと言うのか全く分からなかった。

そんな事があった後、母の言う「かっこいいお洋服」はタンスの中に収まり、見る事はなくなったのだが、今度は、母が「かっこいいランドセルだよ！」と目力も強く、プレゼンして来た。

箱に入ったランドセルを、就学を控えた娘の為に買って来てくれたらしかった。

今になって考えると、いつも行っていた横浜の街で、どうして一緒に選ばせてくれなかったのだろう、と不思議になるが、当時は、選ぶと言っても赤か黒かの二色が主流であった。敢えて選ぶとすれば、本革かクラリーノかというところだ。

さて、いつになく饒舌な母のプレゼンを耳にしながら、箱を開けた時の私の顔を、タイムマシーンで過去に戻って是非この目で見てみたい、というのが私の夢なのだが、その時の私は、さぞ目を疑っていた事だろう。母が間違いをしてる、と思っただろうか。いや、いつもママは正しい事をするから、間違ってるのは私の方か？

とにかく最上級にテンパったに違いないのだ。

箱を開けると、黒いランドセルがあった。

最上級に固まっていたと思われる私の前で、母のプレゼンは尚も続けられた。

「ただみんなと一緒で赤いランドセルにしたらつまんないよ。」

「みんなと違ってるのが良いんだよ。女の子が黒いランドセル背負ってるの、かっこいいよ！」

キラキラと異様に光る母の目。いつものママと違う、と肌で感じた気がする。

そりゃあ、女の子が赤、男の子は黒、という決まりがある訳でもなんでもない。

でも私は、他の女の子達と同じ様に、赤いランドセルを背負って学校に行きたかった。

頭は混乱する一方で、自分自身の感情がもはやわからなくなっていた。

い-や-だ！

の三音節を自分が言えるまで、何億光年もかかる気がした。

母の気持ちはちっとも分からなかった。何だか罰を受けている様な感じがしていた。

かっこいいお洋服の時には見せていた無難な嬉しい素振りも、今回はただただ不可能だった。

呑気者で鈍い私が、地元の横浜国大付属小学校に通う児童達の背負っているランドセルが、男女に関わらず全員、黒。という事に気付いたのは、五年も六年も経ってからだった。

母は、プライドが高い人物であったのだろうか。

だとしたら、もう少し私が賢く立ち回る、お受験にも対応出来る子供だったら良かったのに、と口惜しい限りである。

8呑気者

母のお里にお嫁に来ていた和子伯母ちゃんは、お風呂が好きな人だった。

自らがする入浴ではなくて、子供たちや甥っ子姪っ子達が、お風呂に入ってさっぱりしている様子を見るのが好きな人だった。

まだお天道様が高々と上がって、この後寝るまでの時間もたっぷり汗をかくだろうと思われる時間帯に、伯母ちゃんは早々とお風呂の準備を整え、その辺でウロウロしている小さい子を見つけては「あんた、はよお風呂はいって来んさい。」と元気に掛け声をかけた。

それぞれの遊びに夢中になっている子供たちだったが、和子伯母ちゃんの、腹から響くような野太い声の号令がかかると、シャンとしてさっさかシャツを脱ぎ、狭いけどきれいにお掃除されたお風呂場へと、口答えもせず吸い込まれて行った。

小さい浴槽の、狭いお風呂場だったが、窓から明るい日差しが差し込んで、タイルの壁の水滴がキラキラっと光っていて、妹とも母とも一緒ではなく一人っきりの入浴なのに、なぜだか心細くもなく、入浴剤の良い香りを独占しながら温まっていたものだった。

さっぱりしてお風呂から上がると、

「はい、次の子は誰じゃったかね？次々入りんさい！」と伯母ちゃんがお待ちかね。

男の子たちがふざけて言う事を聞かないとなると、

「調子に乗りなさんな！」

声色を変える訳でもないのに、セリフが変わるだけで、ものすごくドスのきいた響きになり、子供たちは震え上がる。

伯母ちゃんはリアルな魔女の様だった。

夏場、親戚中の子供たちが結集する訳なので、洗濯物の量の多さや、誰の分か、という管理なども、なかなか把握し切れない状態であった。

それでも、洗濯物を山にしておく事はなく、手の空いた大人が、畳むまでは行かずとも、ちょこちょこっと仕分けをして置いておいてくれていた。

ある時、私はお風呂上がりに洗濯物置き場から自分のパンツとパジャマを探していた。

パジャマはすぐ見つかるのだが、パンツが分からない。

同じ様な年齢の女の子が数人いて、似た様なパンツがどっさり出てくるのだ。

困っていると、通りかかった伯母ちゃんだかおばあちゃんだかが、一緒に探してくれた。

「これが珠よっちゃんのやね～」と、手渡してくれた。私はいつもの様に、うなずくだけか、「うん。」という返事だけで、パンツを受け取った。

パンツをはいて、パジャマを着た。その時だった。

お尻に、強烈な痛みを感じたのである。

刺す様な痛みと熱さみたいな感じが一挙に襲ってきた風だった。

火のついた様に泣き叫ぶ私に、大人たちは慌てて対応し、パジャマを脱がせて調べ、パンツを裏返して調べてみた。

すると、一匹の蜂がブ～ン、と飛び去って行ったのだ。

パンツの中に蜂が潜んでいようとは、洗濯物を取り込む人も夢にも思わなかっただろう。

更に気付かずにはいてしまう子がいるとは、皆予想もしなかっただろう。

私は、返す返すも折り紙付きの、呑気者の子供だったのだ。

和子伯母ちゃんは、お風呂上がりの子供には皆平等に、お店のドリンクケースから飲み物を出して飲む事を許してくれていたから、その後私も腫れたお尻を持て余しながら飲み物を選びに行った。

お気に入りの炭酸入り乳酸菌飲料は、いつもと同じ味がした。

9くみ子姉ちゃん

いとこの中で一番の年長者は、くみ子姉ちゃんだった。

末が男の子の三人姉弟の長女のくみちゃんは、笑顔が人懐っこくてがっしりした体格の、ザ・頼れるお姉ちゃん。

いとこの中では、おてんば年少組の女の子達より少し年上になる私が、その輪に入れずポツンとしていると、くみちゃんが何となく気にしてくれて、自分の勉強机の所で色々と相手をしてくれた。

勉強机に向かって、椅子に座ってお話をするくみちゃんは、私が小学生の時には既に中学生になっていたせいか、すごく大人っぽく見えて、ドギマギした。

「中学校に行ったら、こんなんするんよ。」

机の本棚に並んでいる教科書を出して、ページをパラパラと送って見せてくれるくみちゃん。

難しそうだなあ、すごいなあ。わざわざ見せてくれて、嬉しいな。私も中学校へ行ったらこんな勉強するのかな。

くみちゃんへの憧れの気持ちがホンワカと湧いて来る。

すると、私にとっては難解な教科書を見るともなしに見ていたくみちゃんは、不意に、もう我慢ならん、とでも言う様に、素早くある本を引き抜いて、机の上に出すが早いか、開きぐせの付いたページを一気に開いた。

突然の展開に戸惑う間もなく、開いたアイドル雑誌のページに大きく載っている三人の男の人の顔が私にも見えた。

「うち、この子が好きなんよ～！まーちゃんっていうんよ！」

「ジャニーズジュニア言うんよ。知っとる？」

くみちゃんは、持ち前の人懐っこい笑顔を一段と輝かせて、緩みきったほっぺで聞いてくる。

私は、全然、ジャニーズのジャの字も知らなかったし、ついさっき教科書を手にしていた時のくみちゃんと、今のくみちゃんとの落差に着いて行く事で精一杯だったので、今のくみちゃんになんて言って返事をするのが良いのかわからなくなっていた。

ただ、世にも幸せそうなくみちゃんの笑顔と、1オクターブ半くらい上がった声のトーンで、私の顔もつられて自然と笑顔になっていた。

「知らんのん？ほんならよう見てみいな～。カッコえかろう～！ほんでこのまーちゃんが可愛いんよ～。うちまーちゃんが好きなん。八重歯があろう。笑うたら可愛いんよ～。」

くみちゃんの優しい所は、初心者である相手に、とても分かりやすくレクチャーしてくれて、相手の気持ちを尊重しながら、具体的にアドバイスを与えるという事が、自然にできる所だった。

かくして私は、三人組のジャニーズジュニアのファンとなって、くみちゃんと一緒に、勉強机に向かって並んで座り、アイドル雑誌を広げてキャーキャー言っては胸を焦がす様になった。

くみちゃんのお母さんの和子伯母ちゃんが、「くみ子はお肉はよう食べんのんよ。」とよく言っていた。

タンパク源としては、もっぱら鶏卵を食していたくみちゃんだった。

土間のお台所で、おばあちゃんや伯母ちゃんがご飯の支度をするそばで、火鉢の上に卵焼き器を置いて座り、卵液をそーっと注いで火鉢の熱で焼いて、自分が食べる用の卵焼きをゆっくりゆっくり作っていたくみちゃんだった。

器用だな～、と感心して見ていたが、極めつけは朝のトーストの時だった。くみちゃんは、バターを塗ったトーストに、事もなげにイチゴジャムを重ねて塗るのだが、絶妙に薄く塗りのばされていて、ジャムの赤い色がほとんどわからなくなっている。ギリギリ、イチゴジャムだとわかるレベルの代物だった。

職人さんみたいなくみちゃんだった。

ある年、それは年末年始に帰省した時だった。いつもの様にお台所の土間で自分用のおかずを作るくみちゃんが、和子伯母ちゃんの大きな声で叱られている時があった。

くみちゃんの腰巾着だった私が、何事かと目を見張り耳をそばだてると、どうやらくみちゃんが元旦の日に、お年玉を持ってお友達と映画を観に行ったとかで、前もって親に報告もなく行ったという事で、叱られていた様だった。

まーちゃんの話題では弾ける笑顔を見せてくれるくみちゃんが、その時はうつむいてシュンとしていて、可哀想みたいだった。

映画を観に行くだけで怒られるのか～。ここの家の子じゃなくて良かった、とヒヤヒヤしながら聞いている、小姑の様な私だった。

夏休みに帰省した年には、また別のくみちゃんを見た。

夜、とっぷり日が暮れてから、菩提寺のお祭りにいとこ達みんなで行こうという運びになった。

「くみ子がおるんじゃけえ、大人はいらんね。」

という事で、浴衣姿の子供達は、普段着のミニスカートのくみちゃんに着いて歩き出す。

「行って来んさい。」

見送りの大人達の姿が街灯に照らされていたはずが、山の上のお寺さんに向かって舗道を歩き始めると、頼みの街灯が全く無くなってしまった。

それまで経験した事も無い、漆黒の闇の世界である。

何も見えない。

「くみちゃん、いる？どこ？」

子供達は怯えて足がすくむが、相当遠くの方から

「ちゃんと着いて来にゃ迷子になるで。置いて行かれても知らんで。」

というくみちゃんの声を確認し、恐る恐るそちらの方向に足を運ぶ。

懐中電灯のひとつも持っていないのに、くみちゃんには道がありありとわかっている様で、普段から早足なのも手伝って、難なくお寺さんに向かって歩みを進めている様子なのだ。

「待ってよ～。」

真っ暗で引き返すこともままならず、半べそをかきながらくみちゃんを探す子供達。

くみちゃんの優しい所は、ことさらに歩みを遅める事はせずとも、常に声を出して、後ろの子供達に進む方向を知らせてくれていた所だ。

怖くて足がすくみ、私など普段ならとっくのとうに大泣きしている所だが、自分で何とかしないとどうにもならない！というシチュエーションの中、必死でくみちゃんに着いて行った。

不意にお寺のお祭りの灯りが届いて、くみちゃんの後ろ姿が目の前に浮かび上がった。

普段着のミニスカートに身を包んだガッチリした体型のくみちゃん。言いようもなく、頼もしく見え、私の目には神々しく写った。

母親ベッタリの私にとって、母親以外に信頼出来る人物像を描くきっかけを与えてくれた、優しい優しいくみ子姉ちゃんだった。

10そこつ者

毎年の帰省中には、母の実の姉である、幼稚園の園長先生をしていた桂子おばの家に、数泊滞在するのが常であった。

私は、幼稚園に来ている訳でもないのに幼稚園の先生に見張られている様な気がして、妙に落ち着かない気持ちで過ごしていた。

おばは、周りの人達を上手に動かす事に長けていて、自身では大いに口を使うのみで周囲に指示を出し、環境を思いのままに整えている様な所があった。

別に難しいミッションを投げかけて来るのではなく、例えば、「そこの障子を閉めとってね。」とか、「誰も見とらんけ、テレビ消しとって。」とかいう単純な内容だったが、依頼の内容を言う前の、おばの呼びかけの声が怖くて、いつ何を頼まれる為に名前を呼ばれるだろうかと、常にビクビクしていた。

「珠ちゃん！」

心臓がドキッとする。ものすごく明瞭な発音と発声で呼びかけて来るのである。

私以外の、例えば桂子おばの娘であるいとこ達は、いきなり名前を呼ばれても、身じろぎもせず、「何ねえ？」と返していた。

私には到底真似の出来ない神業だと感心して見ていた。

さて、その夜も、予想も出来ない状況の中でおばにいきなり呼びかけられた。

ミッションは何かと身構える私に、「魚に骨があるけえ、喉に刺さらん様によう気いつけて食べんさいよ。」

夕ご飯のおかずの焼き魚の事であった。

何か仕事を頼まれた訳じゃなかった、と安心してホッとしても、呼ばれて一瞬緊張が走った身体はすぐには緩まず、どこかしゃちほこばったまま、食事を続けた。

ほどなくして、影響が出た。

絵に描いたように、今しがたのおばの注意を無にしてしまったのである。

「ご飯を丸呑みしてみんさい！」

涙目になりながら、ご飯を飲み込んでも、魚の骨が刺さった喉の奥が痛い。全然取れない。

みんな、ご飯を食べるどころではなくなって、目を白黒させている私にかかりっきりになるが、時間ばかりが過ぎ、とうとう耳鼻科に行って助けて貰うことになった。

桂子おばが車を出して、病院まで連れて行ってくれ、やっとの事で苦痛から開放された私であった。

「よいよこの子はどんくさい子じゃのう。」という言葉は、おばの心の中にしまっておいてくれたのか、私の前では言わないでいてくれたのか、どちらかであろう。

注意された事をわざわざやってしまうのは、私にとっては常々だった。

小学校の図工の時間。

彫刻刀の扱い方の説明をしっかと聞いていたにも関わらず、わざとの様に手の甲を彫ってしまう。

はたまた、お習字の時間。

書き終わってすずりを持って洗い場の順番待ちをしながら、すずりが傾いたのに気付かず、母が縫ってくれたおニューのワンピースに墨をダラダラこぼしてしまう。

自分で痛い思いをしないと、物事が分からないというタイプの様だった。

物事が起こってしまってから後になって、理屈が分かって来るのだ。

鎌倉のおばあちゃんの家に行った時もそうだった。

白い秋田犬のユキちゃんがちゃんとケージの中に入っているかどうか、確かめてから遊びなさい、と母に言われていたのに、その日私は、おばあちゃんの家に着くなり一人で幼稚園の先生ごっこを始めた。

エア園児達を並ばせて引率していると、庭の向こうからユキがものすごい勢いで走って来た。そして腰を抜かした私の頭を、大きな口でガップリと噛み付いたのである。

言わずもがな。

母は車の運転免許を当時は持っていなかったので、タクシーで病院に運ばれた。

頭に包帯をグルグル巻にされて帰って来たが、自分の姿を鏡に写して見た時の気持ちも、その包帯巻の姿も、忘れられない。

子供心に、こんな自分とこの先ずっと、付き合って行くしかないのだな。と、悟りを開いていたのではないだろうか。

11プロの技

飛び込みでの小学校のお受験に失敗した母は、(私のせいでは断じてない。)今後は二度と同じ過ちはしまい、と心に誓った様だ。

何事も、早め早めの準備を怠らず、日々の鍛錬に非常に重きを置くようになった。

鎌倉の、1DK のアパートで、私は幼稚園のうちは足踏みオルガンをブーカブーカと奏でて楽しんでいたが、小学校に上がると、オルガンがいきなり撤去されて、代わりに真っ黒くて冷たいピアノが設置された。

茶色くて、可愛らしい音で歌うオルガンは、そこに「いる」という感じだったが、黒光りして気位の高いピアノは、要らないのに「ある」という印象だった。

狭いアパートの部屋だし、経済的な面からも、もちろんグランドピアノではなく、行儀よく壁に沿って佇むアップライトピアノであった。

オルガンで練習しながら、少し前から通い始めていたピアノのレッスンは、一学年下にあたるよし子ちゃんと二人で一緒に通っていた。

よし子ちゃんのお母さんは、幼稚園のママ友として私の母と懇意にしてくれていた人だった。

瀬戸内のお里から、遠い関東の地に嫁ぎ、夫は社畜で、子供二人の世話はワンオペ、という境遇の母を、何かと気遣ってくれていて、母も全面的に信頼して、頼りにしていた存在であった。

「習い事はきっちり身に付けさせた方がいいよ。遊び半分なら最初からやらない方がいい。元手がかかってんだから。」

園長先生の桂子おばとは、また少し違ったタイプの厳しさを備えた方で、聞く者を大いに納得させる、説得力に満ちた語り口が特徴だった。

更に、よし子ちゃんの苗字は、大田さんと言って、母の旧姓とずばりリンクした。

アパートでポツンと心細く暮らしている母の心を、頼れる大田さんがわし掴みにするのは自明の理であった。

「うちは二時間練習させてるよ。サボってたら下からほうきでドンドン突いてやるんだよ。」

よし子ちゃんの家は一軒家で、二階のよし子ちゃんの部屋にピアノが置いてあって、一階の居間でお母さんが監視して、練習をさせているという事だった。

練習に疲れて床に座り休んでいると、一階の天井をドンドンと突いて来るほうきの柄の音がお尻に響き、飛び上がってまた練習に戻る、という寸法だ。

アパート住まいの我が家の場合は、手法をそっくり真似させて貰う事は叶わず、ほうきの代わりには、竹製のものさしが小道具として採用された。

母は手先がとても器用な人で、洋裁や編み物を得意としていて、私や妹の衣服は大抵、何でも手作りしてくれた。

色違いや、お揃いなど、妹とサイズ違いで愛情いっぱいの作品をたくさん作ってくれていた。

生地屋さんに行って、布の模様を一緒に選ばせて貰うのが好きだった。

気に入った生地が見つかると、反物の様に生地をぐるぐる巻きつけてある長い板を抱えて裁断用の台まで持っていく。

するとお店の人が、「お嬢ちゃんだったら、2メーターで足りますよ。」と言いながら、ロールケーキ状に巻かれた生地をクルクル～っと広げて、長～いものさしを生地の端に当て、手早く測っていく。

ここまで、と目印を決めたら、裁ちバサミで一気にザ～っと布を裁断する。

その様子がかっこよくて気持ちよくて、いつも見るのを楽しみにしていた。

長いものさしをスっと取り出して、危なげも無く取り扱うプロの仕事は、とても所作が美しく、ひとつの完成された芸術の様だった。

洋裁好きの母も、ものさしを持っていた。

玄人はだしだったから、1メートル尺の、竹製の逸品である。

時たま、洋裁以外の用途で使われる運命を持つものさしというのがある様で、たまたま我が家にやって来ていたらしいのだ。

オルガンが好きだった私としては、冷たく光るピアノの前で、優しくない椅子に座ってやさぐれているしかなかったのだが、とある日唐突に、私の視界に、場違いなそれが入ってきた。

練習の様子を監視するために、隣りにくっ付くようにして座る母の手に、それは握られていた。

手の形が違う。

指が寝ている。

その度に、ものさしは母の手に操られ私の手の甲や指を叩いた。

痛かったのか、嫌だったのか、どうだったのか、思い出せない。

実際にそんな出来事が起こっていたのだろうか？

証拠はあるのかと聞かれれば、答えようはない。

私の頭の中にしか、その場面のメモリーはない。

鍛錬。修練。

娘の将来のために。娘が人生を切り開いて行くために。

親というものは、一心にそう願って動くものなのであろう。

叩かれた指や手の甲の痛みは、記憶には残っていない。

涙を堪えて、頑なに手をグーにして両膝に押し付け、いつまでも動かずにピアノの椅子に座り続けている自分の姿を俯瞰していた事は記憶に残っている。

根比べに負けて、母がフラフラ離れて行った場面も、思い出せる。

身体の痛みは忘れても、心の痛手は残るという事なのだろうか？

もしもあの時の母がこの私だったら、黒光りする冷たいピアノと仲良くなれる様なきっかけを、娘に与えてやりたいと考えるだろうな、と普通に思っている。

12おんぶ

母の長兄である年雄伯父ちゃんの事が、私はとても怖かった。

年雄伯父ちゃんのすぐ下の、桂子おばの怖さと似通っている部分があるからという理由は、まず挙げられるだろう。

つまり、声が大きくて、周りの者に理不尽な命令を威圧的にして来るから。という物だ。

うっかり近くに寄ると百発百中、餌食にされるという結末までよく似ていた。

「ビービー言わんようになってから来い言おんのじゃー。」

切れ長の、意志の強さがよく表れている目で、キッと睨まれる。

恐怖で息も詰まりそうになり、私は蛇に睨まれたカエルどころの醜態ではなかった。

エメラルドグリーンとトルコブルーをブレンドして、気持ちだけ金粉をまぶした様な瀬戸内の穏やかな海が、真っ青に抜ける空を写しているそのすぐそばで、道路一本を挟んだ大田商店の、店先からも良く見える部屋の、海に沿った窓際に、年雄伯父ちゃんはいつも座っていた。

木の床の上にゴザを敷き詰めてある様な部屋であったから、伯父ちゃんが座る場所には、座布団が敷かれていた。

定位置が決まっていて、窓枠に肘などを預けながら身体を支えて、お店に来るお客さんや、隣の居間にいる家族などに、大きな声でいつも話しかけていた。

三人の子供たちに、何かと難癖を付けては小言を言っていて、聞いているだけで心臓がバクバクしたものだった。

大人の男性の声にしては甲高くて、キンキンと響く様な感じの話し方だったから、伯父ちゃんの視界にはとにかく入らない様にと、私はコソコソと隠れる様にして動いていた。

それでも勘が鋭い伯父ちゃんは瞬時に私の動きを察知して、「珠代はそこでなんしょんね？！」と、居間や台所にいる人がわざわざ見に来る程に、甲高い声で暴露する。

悪事がバレた様な気持ちになって、すごすごと伯父ちゃんの前に歩み出て、公開処刑の憂き目を見る事は往々にしてあった。

そんな伯父ちゃんが大きい声で呼びつけなくても、時おり伯父ちゃんの所に行っている人物がいる事には、たいがい呑気物の私でも、気が付いていた。

伯父ちゃんが座っている場所に、和子伯母ちゃんがしゃがみこみ、「ヨッコラセ！」と掛け声をかけながら、伯父ちゃんをおんぶするのだ。

伯父ちゃんの身体は、とても痩せていて骨ばっていた。

座る、と言うより、しゃがむという感じで定位置に収まっていた。

お正月に何度か家族で初詣に行った事がある川崎大師の参道で、同じ様にやせ細ってしゃがんだり座ったりして道端に並んでいる人々を見た事があり、その時の光景を思い出してしまい、恐怖がよみがえる様な気がしていた。

大師様の参道にいた人々は、戦争で怪我をして困っている人たちなんだよと、母が教えてくれていた。

手足の一部を失い、装具を付けている様子を、怖々盗み見ていた。

年雄伯父ちゃんは、装具は付けていなかったけれど、両方の足の自由を失っていた。

用を足したくなると、連れ合いにはピピッと伝わるのか、毎回、伯母ちゃんが「はい行きまっせ。」と言いながら台所から居間を突っ切ってやって来る。

そして軽々と伯父ちゃんをおんぶして廊下を闊歩して行く。

豪快な和子伯母ちゃんだけど、お手洗いから帰って来て伯父ちゃんを定位置に戻す時は、優しく衝撃が少ない様に気を付けている風に見えた。

「もっと優しゅう置いてくれ！」と伯父ちゃん。

「ちゃんと座っときんさい。」と言いながら台所に戻る伯母ちゃん。

伯母ちゃんは、いつも目が笑っていたなあ。

「伯父ちゃんも戦争に行って怪我したの？」と一度母に聞いた事がある。

広島の街も遠くない。

学校で教わった、大きな爆弾が落ちた時は、ママはいくつだったの？

６歳。と言って教えてくれたけど、伯父ちゃんの足の怪我の原因は、結局はっきり教えては貰えなかった。

怖い怖いと隠れていないで、伯父ちゃんの隣に座って、お話したら良かったのになあ。

そんな事を50数年越しで、考えている。

１３負けず嫌い

桂子おばの家は、母のお里の隣り島にあった。

おばの実家でもある大田商店と違って、海から少し離れた、と言っても徒歩で15分くらいだが、山側に向かって、民家の連なる道を進んだ場所にあった。

たったそれだけ海から離れただけでも、随分景色が変わって、
家々がきっちり並んで建っているエリアから、山側にだらだら坂を
進むに連れ、少しずつそれらの間隔が開いて来る。

おばの家に着いて、二階の部屋の窓から更に上の方を見てみると、民家がポツポツと離れて建っているのがわかった。

その代わりに、あちこちの空き地が草っ原になって、それがいっぱい繋がって行って、ついには山裾となってなだらかな傾斜を描いていた。

少し寂しげなその景色を見るのも好きだった。

日が暮れると、山まで続く家々の窓に、控えめな明かりがともり始める。

(海から離れると、こんなに寂しい気持ちになるのかな…)と感傷に浸っている私の耳元で、弾けるような知恵ちゃんの声が聞こえた。

「めぐちゃん、部屋に電気つけとる。おとくさ！」

不意をつかれて振り返ると、プリプリ怒っているいとこの知恵ちゃんの顔があった。

「わからん？いちいち自分の部屋の電気つけとるゆう事は、勉強しとるゆうこっちゃ。」

「みっちゃんおばちゃんが、ご飯じゃけ、来て手伝いんさい言おるで。」

プリプリしながら知恵ちゃんは階段を降りて行った。

母の使いで私を探して来た様だ。

子供同士でつるむよりも、どちらかと言うと大人のご機嫌伺いに長けている知恵ちゃんだった。

お友達の家がこんなに近くて、しかも間取りまで知ってるんじゃ、負けず嫌いの知恵ちゃんが穏やかでいられない気持ちも分からないではない。

それにしてもさっき耳にした、知恵ちゃんが言ってた言葉は何だろう？初めて聞いた。

後で念の為に確認してみた。

「おとくさ、言うんは、まあ、癪に障るゆう様な意味よ。」

知恵ちゃんは、聡明そうな大きな瞳で目配せしながら、教えてくれた。

大田商店に住んでいるくみ子姉ちゃんと私の年齢差の、ちょうど真ん中くらいに知恵ちゃんがいた。

ちびっ子ガールズの輪に入れない私は、この知恵ちゃんと、くみちゃんのユニットに加えて貰って過ごす事が多かった。

くみちゃんが知恵ちゃんの家に来る事は基本的にはなくて、三人揃うのは大田商店でのみだった。

桂子おばの家に何泊かさせて貰うと、居間でおばと母が、ちゃぶ台を挟んで深刻そうに声を潜めて、重苦しい空気を漂わせながら話している事がしばしばあった。

私は居場所がなくなるので、他の部屋をフラフラして探検したり、窓から外を見たり。

それでもふすま越しに、二人の低い声は漏れ聞こえて来る。

何となく所在なくて、そこにあったピアノの蓋を開けてしまったのが運の尽きだった。

おばが耳ざとく聞きつけて言った。

「珠ちゃん、はよ弾いてーなー。弾いてくれるんじゃろ？今、何を練習しとるの？おばちゃんに聴かせて。」

(またおばちゃん、気取った声出してる。)

姪っ子に何かさせようと企んでいる時のおばの声は、普段より高くなり、声量も大きくなり、心なしか言葉遣いも上品になる。

大人二人で何やら悪い相談をしていた様な流れに加担するみたいで、頼まれたからと言って、今ピアノを披露するのは絶対に嫌だった。

頑なに拒むしかない。

意地と意地のぶつかり合いで、火花が散る勢いである。

そこへ、出かけていた知恵ちゃんが帰って来た。

頭が切れて、素早い状況判断などお手の物の彼女は、折衷案を提案するのだ。

「ほな、ふすま閉めたまんま弾いたらええが。ここ、うちが押さえとってあげるけえ、このまんま弾きんさい。そんならえかろ？」

知恵ちゃんは子供だから、こっち側だと信用した私は、了解して、ピアノのレッスンで今やっている曲を弾き始めた。

ただし、目は知恵ちゃんの手元から外す事は出来ない。いつ、ふすまを押さえる手が滑って開いてしまうか分からない。

知恵ちゃんは、身体を私の方に向けて両手を後ろに回し、ふすまの取っ手を後ろ手に持って、私のピアノを聴いていた様だった。

しかし、不意に大きな瞳に怪しい光を宿したと思ったら、次の瞬間、思いっ切り両手を開いて、ふすまをフルオープンにしたのだ。

ちゃぶ台に向かい合って座り、こちらに顔を向けて聴いている二人の大人たち。

恥ずかしいし、悔しいし、なんとも言えずかっこ悪いし。

顔から火が出そうになって、よっぽどで弾くのを止めようと思ったけど、その時目の端に写った、知恵ちゃんのしてやったりの表情！

所詮、子供なんてこんなもんよ、と目で語っている。

騙されたのは悔しいけど、ここで止めるのも、また悔しい。

結局私は、視線を知恵ちゃんから自分の手元に移して、最後まで曲を弾き切った。

おませな知恵ちゃんは、当時まだ小学生だったのだ。中学年か、高学年にもなっていたとしたら、しっかり者の女子あるあるなのかも知れない。

おませな知恵ちゃんだったら、おばと母の内緒話を耳にしても、聞き流してあげる度量を持っていた事だろう。

たまに会う実の姉妹である。嫁ぎ先や、夫や、子供など、諸々、悩み事の相談もあったのであろう。

二つ年上なだけなのに、くみちゃんとはまた違った狡猾さを持つ知恵ちゃんの手のひらの上で、転がされていた私だった。

色々あってもみんなで賑やかに団らんした後、寝室に行って布団に入ると、決まって犬の遠吠えが聞こえていた。

島には、野犬がたくさん暮らしていて、時には群れをなして疾走している事もあったが、日中、道で行き合ったりする野犬は、一頭で大人しく歩いており、誠に行儀よくすれ違って行った。

１４アカデミック

いとこの知恵ちゃんの家にも、我が家と同じ様にアップライトピアノがあった。

広い一軒家だったから、居間の隣の六畳間に、ドーンと単独で置いてあった。

知恵ちゃんがピアノを始めたのは、私が始める少し前の時期で、我が母と同じ様に、手に職を、を考えた桂子おばが、きっかけを与えた様だ。

おば自身も、幼稚園の教諭の採用試験に備えて、ピアノのレッスンを受けた事はあった様だが、娘に手ほどきするだけの技量と余裕はなかったと思われる。

おばの遠い親戚にあたる女性が、東京の音楽大学を出られて、おばと同じ郷里の島で、ピアノ教室を開いておられた。

卒業されて間も無い、お若い先生だった。

一度、知恵ちゃんのレッスンに着いて行った事があるが、レッスンが終わって帰途に着く知恵ちゃんを、手を振って見送ってくれていた先生の姿が印象的だった。

親戚の娘さんが、音楽大学を卒業後に、生家に帰って来てピアノ教室を開く、というシナリオを、おばはいたく気に入って、いわゆる跡継ぎの男の子が産まれなかったおば家の、将来の保険にしようと考えたという流れだろうか。

家で練習にいそしんでいる知恵ちゃんの姿はあまり見た事はないが、週に一回のレッスンには、ちゃんちゃんと通って行っていた。

園長先生をしていたおばは、日常の勤務に慢心する事なく、常に探究心を持ってアンテナを張り、教育関係の研修などにも積極的に参加し、勉強を続ける人だった。

東京で開かれる研修会に参加するために、二人の子供の世話を夫に託し、単身、泊まりがけで上京する事も、一度や二度ではなかった。

御茶ノ水あたりの学生会館はしょっちゅう利用していた様だ。

時には、鎌倉の我が家に泊まって行く事もあったが、島で見る快活さを更にアップデートさせた様な、職業婦人モードのおばは、まるで別の世界から飛び込んで来た人の様に、眩しかった。

当時、女性が大学まで進学する事は、相当恵まれた環境と、涙ぐましいまでの本人の努力と根性が必須であった事だろう。

大田家では、６人兄弟のうち男子三名は大学に進学したが、女子は長女しか行かせて貰えなかった、と、母がよく言っていた。

女子の中で唯一、進学させて貰えた桂子おばは、自分も学びたかったと感じているであろう妹達に顔向けする意味もあったのか、幼

児教育の真髄を学びたい、とまで言って、本当に努力を重ねている人だった。

熱い向学心や、限りない探究心。

家の中には、いつもおばがかもし出すそんなアカデミックな雰囲気が溢れていた。

いつもボーッとしている私などは、端っから場違いな存在であったのである。

～母と過ごす～

１５感服

父の意見は盛り込まれる余地もなかったのだろうと予想されるが、母は娘に、小学校の六年間を真っ黒いランドセルで過ごすという苦行を問答無用に課す事を、自分自身に許した。

あくまでもNOと言い続け、断固登校を拒否し、赤いランドセルを所有する権利をとことんまで主張する資格は私にだってあったはずだ。

未使用であったら、購入した店舗に事情を話して、商品を交換してもらう事だって決して難しい事ではなかったはずだ。

しかし私は、どういった訳か、好きになれないピアノの様に冷たく黒光りのする、高級本革製の重たいランドセルを背負って、新一年生となった。

100名以上の新入学児達がコロコロじゃれ合いながらの登下校時に、紺のスカートとピンクのシューズをはいた、前面から見ると間違

いなく女児と思われる児童が、背面に回るなり、黒のランドセルを背負っている。

基本的に、身体とランドセルの大きさの対比として、背負われていると表現する方がふさわしいというのは他の子と同じではあるが。という風に眺めた教員も少なからずいたであろう。

お兄ちゃんのお下がりかな、と児童の家庭の経済状況を案じる人や、のっぴきならない家の事情について想像を巡らす人もいたかも知れない。

兎にも角にも、私のランドセル姿を目にした人物は、(新一年生なり。前途に幸あれ！)という様な祝福のエール以外に、何かしらの思いに、心を波立たせたのではないだろうか。

普段からボーッとして過ごすのが好きで、出来れば大勢の中に埋もれて目立たず、みんなと一緒に漂っていたいだけの子供だった私なのに、ランドセルに関わる記憶をたどるとそこには、対面する

相手の、戸惑いにも似た表情や感情を感じ取ってしまい、逆に、ご心配おかけしてすみません、という様な、申し訳ない気持ちを抱いてしまう自分がいた事に気付かされる。

入学した、鎌倉市立の小学校では、判で押した様に、黒いランドセルは男児しか背負っていなかった。

少なくとも市内の小学校の新入学児童の中に、私学を除いて、例外はいなかったであろう。

そういう時代だった。

私自身、受け入れられない気持ちが燻っていたのではないかと思い出されるエピソードがある。

ある朝、登校前に母が、私の耳掃除をすると言った。

私が、耳の中で何か音がする、とでも言い出したのだろうと思われるが、耳かきを探している時間がないと母は判断し、自らの髪からピンを外して、それを使って私の耳の中を調べた。

それが痛かったらしい。

ヘアピンの尖った先端が耳の中を引っかいた程度だろうと思われるが、そこまで泣く程の痛みではないだろう、というくらいのわめき声を、私はあげ、そして泣き続けた。

一緒に登校していたマリちゃんが玄関先に来てくれたので、靴を履いて出かけながらも、泣き続けている。

いつもは玄関で見送る母が、心配して、泉水橋の所まで着いて歩いて来た。

泉水橋を渡って、バス通りの歩道に出ても、滑川を挟んだ向こう岸にいる母にまで届けとばかりに、一層大きな声で泣きわめく。

泣きながら、マリちゃんにおはようも言っていないと気付いているのに、泣き止むタイミングが掴めなくて、意地になって泣いているのだ。

青砥橋、浄明寺とバス停をやり過ごし、観音様の下まで行けば学校は目の前だ。

子役の様にわあわあ泣きながらも、着実に歩みを進められたのは、途中からマリちゃんが私の手をしっかりと握ってくれていたからだった。

歩道で行き合う大人が、号泣している子供に驚いて視線を落とす度、マリちゃんはバツが悪そうな顔をしてうつむいていたが、そのう

ちに、埒が明かないと察したのか、私の手を取りずんずん歩き始めた。

引き摺られる様に歩いていたわからず屋の私も、校舎が見えるくらいの場所まで来ると、ようやく泣き止む努力をし始めた。

波が引くように泣き声が収まると、何事も無かったかの様に手を放すマリちゃん。

面倒かけてごめんね。

還暦越えのおばちゃんが、あの時の小さな可愛いマリちゃんに心からお礼を言います。

私はと言えば、もちろん感謝していた。

今日はマリちゃんが学校に連れて来てくれたと思った。

ただ、感服していた。

あんなに賢くてしっかりした、赤いランドセルを背負った女の子の様には、私は一生なれない、と思っていた。

16川岸の花

父方の祖父は、いわゆる旧鎌倉と言われる地区を選んで、家を建てていた。

近い将来、裏の山が切り開かれて大がかりな宅地が造成される事などは、無論、予想だにせず、太刀洗の源流のせせらぎが古の戦の幻影を映し続けている、質素かつ素朴な土地に、一家は居を構えていた。

長男である父が持った新しい所帯は、祖父の家からバス停一つ分離れた、ささやかな集落の中のアパートで営まれる事になった。

集落の中央には細い道が通っており、バス通りから折れて泉水橋を渡り、界隈で唯一の食料雑貨品店を左に見ながら道を進むと、行き止まりになるまでに、せいぜい200メートル程しかなかったのではないだろうか。

道の途中に、私が住んでいるアパートがあったのだが、不思議な事に、その先の行き止まりの所まで、一度も行った事がない。

一緒に登校していたマリちゃんは、そちら方面から歩いて来ていたが、どんな道になっていてどんなおうちだったのか、見に行った事はなかった。

素朴な道だった。

自動車が一台通れば、幅がいっぱいいっぱいになってしまう。

そして自動車が通るところも、滅多に目にする機会はなかった。

当時は、まだ舗装もされていなかったのではなかろうか。

真っ直ぐに続く細い道が、のどかな陽の光に照らされて、道の脇には草が元気に伸びていて、色とりどりの小さな野の花が混ざり、歩いているとウキウキして来る様な小道だった。

学校帰りには、そんな可愛い野の花を愛でたり摘んだりしながら、お友達とプラプラ歩いて楽しんでいた。

側溝に蓋をしてあるコンクリートの覆いには、ところどころ、持ち上げる時に使う穴が開いているが、道端のお花に夢中になっていた私は、よくその穴に足を突っ込んで転んでいた。

一度などは、膝の上くらいまで穴の中にもぐってしまい、自力でも、お友達の援助を持ってしても、どうしても抜けなくなってしまった。

アパートまで間も無い所まで帰って来ていたので、お友達が母に知らせに走ってくれた。

子供が帰って来るまでの時間でさえ、おちおちゆっくりしていられない母であった。

小道に沿って連なって建つ民家の列を隔てて、並行する様に、滑川が流れていた。

泉水橋の上に立って川を見下ろすと、源流は近いはずだが、随分と川幅が広く、直下は流れがゆったりでも、少し山側の流れを目で追って行くと、川の深さが増していて、川岸の傾斜が険しくなってい

て、橋のかかっているあたりより、ずっと荒々しい景色になっていた。

その景色をことさらにじっくりと、母に見させられた事があった。

母は、私より二年ほど上の学年の、同じ学校の児童が、母の日にお母さんにプレゼントしようと思って、あの険しい川岸に咲いている小さな花を摘むために、橋から降りて行ったという話を語り始めた。

花を摘むことは出来たが、お母さんにプレゼントする事は叶わなかったという話だった。

足を滑らせて、その子は川に落ちてしまい、可哀想な事に、溺れて亡くなってしまった、と。

「絶対に、川にお花を摘みに行ったらダメよ！」

と母は語気を強めた。

私は、まるで崖のようにそそり立って川の水をたたえている、目の前の川岸を凝視した。

あそこにお花が咲いているのを見た事がない。

でも、もし見ちゃったら取りに行きたくなるという事？

ならば私は今後一切、見ない様にしようと決心した。

母の日のプレゼント云々に限らず、可愛いお花を見たら、わが子もまた件の女の子と似た様な行動に出るかも知れないと十分に疑われる事を、母は痛いほどわかっていたのだろう。

17鈴と涙

私の住んでいるアパートがある集落を貫いている小道の奥の方から、毎朝、登校時に玄関まで迎えに来てくれていたお友達の名前は、カタカナで書く、マリちゃんだった。

垢抜けた名前は、そのままマリちゃんの人物像を明確に表していて、目尻の少し上がった勝気そうな目元と、常にキュッと閉じた口元が印象的な、見るからに利発そうな子供だった。

マリちゃんのランドセルには(言うまでもなく赤い色のそれだが)、小さな鈴が結び付けてあって、歩く度に、一歩一歩進む足の運びと同じリズムで、鈴が一緒にシャンシャン、と元気に鳴るのだった。

毎朝、学校の支度をして待機していると、アパートの建物の角くらいから、数世帯分の玄関前を通り過ぎて、一番奥である我が家に向かって、シャンシャン、シャンシャン、と安定したテンポを保った鈴の音がクレッシェンドで聴こえて来る。

鈴の音が一層盛り上がって、いざフォルテとなると同時に、「たーまちゃん！」と、半分透き通ったビードロガラスの様なマリちゃんのソプラノが響く。

待ってました、とばかりにおもむろに玄関のドアを開ける私。

「おはよう！」

マリちゃんの美声に連られて、私も元気な声をあげた。

シャンシャンシャンシャンシャン、「たーまちゃん！」

今でもありありと思い出して口ずさむ事が出来るフレーズである。

登校時はマリちゃんと一緒でも、時々、下校時は一緒でない事があった。

そういう日は決まって、母が、バスに乗って帰って来なさいと言った。

バス停をいくつも通り過ぎて、小学校低学年の女の子が一人で歩いて下校するのは、安全とは思えなかったのだろう。

「泉水橋で降りるのよ。いつも通ってるからわかるでしょ。」

確かに、ひとつ学校寄りのバス停に近いおばあちゃんの家に行く時も、道路を渡った向こう側の集落に住んでいる、ピアノ友達のよ

し子ちゃんの家に行く時も、何度となく歩いているバス通りであった。

その日は、初めてバスに乗って帰る日だった。

母に持たせて貰っていた運賃の小銭を、何とか無事に取り出して握りしめ、バス停に立った。

バスを待っている人がいたので、乗る時はその後に着いてスムーズに乗り込んだ。

「発車オーライ！」

当時は、車両の中ほどのドアから乗車も降車もするシステムで、ドアの所には車掌さんがいた。

私は、乗り込むとすぐ、車掌さんの近くの手すりを持って立ち、降りるバス停を間違えない様に、と早々に身構えていた。

「次は、浄明寺。」

車掌さんが、車内アナウンスをする。マイク越しではなく、肉声だった。

まだ大丈夫大丈夫。

しかし、歩いて移動する道路と、バスの中から見る景色とは、全く別物だった。

あれよあれよという間に、私は自分が降りるバス停をやり過ごしてしまった。

あ、景色が違う！見た事もない所だ！

焦った私は、車掌のお姉さんの方を向いて、「今、降りるんだった。」と半泣きで訴えた。

「降りるんだったの？」

車掌さんは、「十二所、次、止まりまーす。」と、前方の運転手さんの方に向かって大きい声で言った。

運賃を渡して、バスから降りた私は、既に涙腺が崩壊していた。

パニックになっても、来た道を戻れば帰れる、という事には気付いていたので、さっきまでバス代が乗っていた手のひらに、今度は不安でいっぱいの心を握りしめながら、一生懸命に歩いた。

知らない道を、くねくねしたカーブに沿って、ガードレールの中を急ぎ足で歩いた時間の、長く感じた事。

このまま、天涯孤独な生涯を送るのではないかと、天の神様にもすがりたい気持ちになった。

足が宙に浮いた様な感覚のまま、半べそをかいて歩き続けていると、遠くに見慣れた顔が見えて来た。

降りるはずのバス停で待っていた母が、乗り過ごした娘が徒歩で引き返して来るであろう方角を見据えながら立っていた。

「ダメじゃないの。」

母の口から出た第一声は、こうだった。

言われた私も、(本当にダメだ。私はダメだ。)と思ったけれど、ママが待っていてくれて嬉しい、という安心感の方が大きくなって、半泣きが大泣きになった。

「大変だったね。でも頑張ったね。一人でバスで帰って来られて、すごいね。次からはもう、間違えないで降りられるよ。今日は間違えても、歩いて戻って来られたね。偉かったね。」

母が娘に伝えたかったのは、本当はこういう言葉だったのではないかと思う。

昔は、子供を甘やかす物ではない、という不文律があったのではなかろうか。

厳しくしつけるのは、子供が人に甘えず、自立した人間になる様に、との願いが根底にあったのだろう。

ただし、人は自分だけで生きて行かれるものではない。

周囲にきちんと甘える事が出来て初めて、自立への道が開けるのではないだろうか。と、もっぱら厳しくしつけられた私は、そう思っている。

１８跡継ぎ

父方の祖父は、剣道の名士だった。

旧鎌倉と言われる地区にある祖父母の家に行くと、応接間の奥の部屋に、剣道の道具が収められていた。

実際に祖父が胴着を付けて、竹刀を振っているところは、残念ながら見た事がない。

祖父は、家父長制の色が濃い時代の真っ只中に生きた人だったので、当然の様に、長男である私の父を跡継ぎとして定めていた。

飛ぶ鳥も落とす勢いの、高度成長期の日本の建設業界の最前線で、エンジニアとして采配をふるう長男が、建設現場を取り仕切りに行った瀬戸内地方から、どこかの島の娘を連れ合いにしたいと言って連れて帰って来た。

古くは小田原城に仕える武士として、代々栄えて来た祖父家である。

長男の連れ合いには、きちんとしたお見合いを経て、由緒ある家柄の娘をあてがうのが筋だと信じて疑う事はなかっただろう。

嫁には、しっかりと家を継ぐ男子を産んで貰わねばならぬ。

そこが一番重要な、嫁選びのポイントとなっていた事だろう。

「ちゃんと親の言う事聞かなきゃ、親にも兄弟にもみんなから相手にされなくなるのよ！」

私を叱る時の母が、唐突にそんな事を口走って、私は一体なんの事やら、身に覚えもない事を咎められている気がして、ポカンとしてしまう事がよくあった。

今思えば、母の結婚は、かなり無理な力がかかっていたのかも知れない。

嫁ぎ先が遠方である。

親としては、近隣の島に嫁いでくれるのが一番安心で有難いと考えていたであろう。

長男である。

跡継ぎを意識しているであろう義両親との、先々の関係なども、案じていたであろう。

また、長男という事は、小姑の問題も自然発生するだろう。

父が働いていた建設現場に、高校を卒業して家事見習い中だった母が、事務関係のアルバイトをしに行ったのだ。

そこで二人は出会い、恋に落ちたという事か。

恋愛結婚の先駆けと言われてしまうくらいの、まだまだ古い時代であった。

熱く燃え上がる恋だったのだろう。

おそらく両家共、その子たちの結婚には少なからず反対意見をとなえたと思われる中、振り切るようにして、恋を実らせた、情熱的なカップルだったのだ。

しかして、結婚後まもなく授かった長子は、男子ではなかった。

「あんた、お母ちゃんのお腹の中に大事なモン忘れて産まれて来てからに。」

と、私の顔を見る度に桂子おばは言っていた。

下ネタの一種かと思って、小さく笑って毎回聞き流していたが、今になってみると、そのおばのセリフの裏に横たわっている重圧が、不気味に覆いかぶさって来る。

産まれる子の性別は当然、母どころか父にとっても感知し得ない領域であるが、私がうっかり母のお腹に大事な物を忘れて出て来てしまったせいで、うら若き瀬戸の花嫁は、生涯に渡って理不尽な責め苦を負う事になってしまうのだった。

母は第二子も産んでいるが、妹もまた、忘れ物をして産まれて来てしまったらしい。

「どしてお姉ちゃんの忘れ物を拾って出て来んかったん？」

妹はおばにいつもこう言われていた。

桂子おばの下ネタ好きには際限が無いな、と呆れて聞いていたが、ただ聞き流して笑い飛ばすには、あまりにも重く暗い現実の影が邪魔をして来るのだった。

親にも兄弟にもみんなから相手にされなく…

追い詰められていた母の叫びだったのだと、今ならわかる。

孤独に耐え忍んでいた母の、精一杯の SOS だったのだ。

子供だった私は、そんな母を励ましてやれる様な、何かを出来ていたのだろうか。

全く思い出せない。

19お茶漬けの味

夏の夕方、まだ夜の帳がおりてもいない時間に、お隣さんのお庭で、ご家族が花火を楽しまれているのを見た事があった。

私のアパートのすぐ隣の広い土地に、庭付きの新しい家が建つと、間もなくご夫婦とお子さんお一人のご家族が入居していた。

我が家は角部屋だったので、お隣さん側にも窓があり、私はその窓のカーテンの隙間から、借景のお庭を鑑賞する事が良くあった。

白い外壁が眩しいオシャレな洋風のお宅で、庭は芝生で覆われていた。

芝生のお庭で花火をするのは無謀ではないかという心配は杞憂に過ぎなかったという事か、その日、私はお隣さん側の窓から、夕闇に踊る花火の色とりどりの光を、吸い込まれる様に見ていた。

トワイライトガーデン花火パーティ、とでも今なら名付けてしまいたくなる様なワクワク感にほだされた私は、翌朝、「花火やりたい。」と母にねだった。

夏休みという訳で、買い置きの花火がある事を私も知っていたのだ。

特に予定が入っている日でもなく、朝のうちは、母も娘の要求をのんでいたのだが、午後になると、予想外にお天気が怪しくなって来た。

「雨が降ったら出来ないんだからね。」と、先回りした母に釘を刺されると、それを言われる回数が重なる毎に、私の熱意が高まってゆくのである。

とうとう本当に雨が降り出して来た時には、世界中が私に意地悪をしているという卑屈な考えに支配され始め、要求を通さない限り

はテコでも動かないしつこさを発揮して、そこいら中にあたり散らしていた。

娘との根比べにおいては、ピアノのお稽古でとうに負けを認めていた母だった。

本降りの雨の中、アパートの玄関のドアを開けて、申し訳程度のひさしの下で雨をよけながらの、思わぬレイニー花火パーティの始まりだ。

私はワクワクしていた。

小さい妹を花火から遠ざけながら、母が次々とマッチで灯けてくれる火を濡らさないように大切に雨風から守り、色とりどりの光を放つ花火を存分に楽しむ、はずだった。

思っていたのと違ったのは、スペースだ。

雨に消されない様に、と無理な動きをするうちに、花火の先が、左手首に当たってしまった。

その後は、熱いの痛いの、雨音もかき消す勢いの乱ちき騒ぎであった。

そんなわけで、私の中では不完全燃焼だった花火パーティなのだが、その後、里美ちゃんという、お隣のお宅のお嬢さんと仲良くなる機会が巡って来た。

私と同じ学校の一学年下に、転入して来たのだ。

お互い、学校から帰るとすぐに合流し、アパートの前の空き地や、集落の中の草っ原で、日が暮れ始めて母が迎えに来るまで、飽きずに遊んでいた。

時には、「うちに遊びにおいでよ！」という誘いに乗っかって、母に報告もせずに、新しいピカピカの里美ちゃんちに上がらせて貰ったりもした。

そんなある日、それは日曜日だったのか、午前中からお隣さんの家に遊びに行った事があった。

ピアノ友達のよし子ちゃんの家には、時々遊びに行ったりお泊まりに行ったりしていたが、よし子ちゃんのお母さんがとても規律正しい方だったので、こちらも随分遠慮しながら過ごさざるを得なかった。

ところが、里美ちゃんのお母さんは、底抜けに明るくて、子供たちが楽しく遊んでいると一緒になってキャーキャー言っている様なタイプの方だった。

そのせいか、普段は引っ込み思案だった私も、里美ちゃんの家に上がらせて貰った時は、割と野放図に振る舞っていたのだ。

まだお昼時には少し時間があるくらいの時刻に、里美ちゃんのお母さんが、「一緒にご飯食べて行ってね。」と言って、美味しそうなオムライスを作ってくれた事があった。

里美ちゃんは一人っ子なので、いつもお母さんと二人きりのご飯。お友達が一緒に食べてくれると喜ぶのだと、お母さんは説明してくれた。

湯気が上がっている、たった今作ってくれたばかりの、ホカホカのオムライス。

ご馳走になっても良いかどうか、母に確認するという事も忘れて、私はテーブルに着いて目の前のオムライスに釘付けになった。

里美ちゃんと一緒に、「いただきます！」と言いかけたまさにその時、怒りに目を吊り上げた母の顔が、ダイニングテーブル越しのガラス窓に浮かび上がった。

そろそろお昼時、という事で、娘を迎えに来たのだった。

と言うよりは、よそのお宅のお昼ご飯をご馳走になろうとしている娘を、頭ごなしに叱りに来たのだった。

そんな所だろう、と予想をして来てみたら、案の定だった訳だ。

里美ちゃんのお母さんが、他意もなく、もういただきますも言った所だからと取りなしてくれたのだが、母はそれに耳も貸さずに、声を荒らげて私を呼んだ。

母の怖い顔を見て、恐れをなして立ち上がり、後ろ髪引かれる思いを引きずりながら私は家に帰った。

さっきまでホカホカのオムライスを前にしてテーブルに着いていた私は、今はちゃぶ台の前に正座して、シャケの切り身とご飯を見ていた。

ご飯をよそったお茶碗に、温かいお茶を注いで、焼き鮭をほぐして混ぜて食べた。

お茶漬けを食べている間、母は、私が里美ちゃんの家のお昼ご飯を食べようとしていた事を、いつまでも咎め続けていたのだった。

その次の年、我が家はアパートから引っ越しをして行く事になるのだが、それまでにもう一度里美ちゃんの家に遊びに行く事はなかった。

２０良い演奏

「とっても良いわよ。もう一度弾いてみてちょうだい。」

目を閉じて、私の奏でる音に合わせてうっとりとした様子で頭をユラユラ揺らして聴いてくれたピアノの先生がいた。

「この曲を、すっかり自分の物にして演奏しているわね。そこが素晴らしい所なのよ。」

習っていた門田先生が旅行に行っている間の一ヶ月限定の、臨時の先生だった。

私は小学3年生になっていた。

そして、引っ越しをして転校する事になり、一緒に登校していたマリちゃんとも離れ離れになっていた。

ただ、門田先生のレッスンは続けていたので、転居先の集合住宅から、バスを乗り継いで、旧鎌倉地区まで一人で通っていた。

「珠代ちゃんはお稽古を怠けているんでしょう。指が動いていないわね。」

門田先生から言われる事として、主な内容はいつもこうだった。

隣の市との境界に近い土地ではあったが、鎌倉市内からは外れずに済んだ転居先は、父の務める建設会社の社宅である集合住宅だった。

門田先生は、臨時の先生として、私の新居からほど近いエリアにお住まいの方を紹介して下さったのだ。

臨時の先生のレッスン室で、緊張気味に弾いた曲を思いがけずも褒められた。

「やっぱりいいわね。うっとりしてしまう位ね。」リクエストに応えて、二回目の演奏を終えた私に、先生は言った。

家に帰った私は、ピアノの前に自発的に座った。

褒めて貰った曲を、なぞる様に何度も弾いた。

元々素敵な曲だったが、本当に良い演奏がどんどん出来る様になって来ている気がした。

ずっと弾いていたかった。

しかし、母はそんな自己満足を見逃してくれる人ではなかった。

「丸貰ったんなら、いつまでもしてないで次の曲の練習しなさい！」

ページをめくられた。

よそよそしい、初めましての曲の楽譜。

頭の中には、暗譜した、先程まで繰り返し弾いていた曲がまだ響いている。

でも、目の前に現れた、新しい曲の譜読みを強いられると、見事に興ざめだ。

心。

私の心は、伸びようとすると何故かチョキンと刈り取られる。

一ヶ月などあっという間に過ぎ、間もなく私はいつもの様に、門田先生のレッスン室で背中を丸めてグランドピアノに向かっていた。

いかに毎日怠けているかを的確に指摘され、感情を動かす事なく淡々としたまま、時間になるとロボットの様に椅子から降りて、夢から醒めたシンデレラさながらに、さようならと言って家路に就いたのだった。

21女優さん

「後で、持って来るね。」

「バイバーイ。」

転校先の小学校で、クラスも通学経路も同じ宏代ちゃんと仲良しになった。

宏代ちゃんとは、月刊の少女漫画雑誌を交換し合って、お互い二種類の雑誌の読者になっていた。

私が「りぼん」を買って、宏代ちゃんが「なかよし」を買う。

読み終わった頃、取り替えっこをして、お互いの雑誌を読み合う仕組みだ。

月刊の分厚い漫画雑誌をランドセルに忍ばせて行く事ははばかられ、下校後や土曜日の午後などに、私が住んでいる社宅の敷地入り口の門の所で受け渡しをしていた。

学校ではとても仲良しなのだが、放課後は意外とお互いの家に行って遊ぶ事があまり無かった。

宏代ちゃんは、北鎌倉の駅にほど近い、見るからに歴史のある古民家に住んでいて、小高い山の裾部分の切り通しが目前に見える場所だった。

切り通しの岩壁が歴史を雄弁に物語っている、子供心にもどこか特別な佇まいを感じる土地だった。

読み終わった「りぼん」を渡して、「なかよし」を受け取る。

部屋に帰って読んでいると、こちらの雑誌のラインナップの方が面白くてゴージャスな様な気がしてくる。

手元に置いておく物が豪華な方が良いに決まっている。

私が「なかよし」を買う方なら良かったのに。

毎月、そんな事を思いながら読んだものだ。

隣の芝生はかも果てしなく青いのであった。

さて、いつもの様に、読み終わった雑誌の受け渡しを終えた私たちが、社宅の敷地内に設置されたブランコやジャングルジムなどのある広場でとりとめのないおしゃべりをしていると、学年が下の子供たちが、にわかに色めきだって歓声を上げ始め、私たちの所にも駆け寄って来て、耳より情報を伝えてくれた事があった。

社宅在住以外の子供たちも、遊具のある広場には日常的に出入りしていて、それはにぎやかな社宅であった。

普段見かけない子まで集まって来て、何やら駅前の焼き肉屋さんに行くと言う。

地元では美味しいと評判のお店で、引っ越して来て間もない我が家も、家族で行った事があった。

その焼き肉屋さんが一体どうしたのかと言うと、ドラマの撮影をしているらしい。

厳密に言うと、撮影が終わった人達が、焼き肉屋さんに入ったという情報だったのである。

カメラマンや、色々と道具を持って運んでいる人達がみんなで焼き肉を食べに入ったらしいと。

極めつけは、主演の女優さんの名が飛び交った事だった。

放送日の翌日は、「見た？」の一言でお友達とわ～っと盛り上がる程、みんなハマっていたドラマに出ている、あの女優さんが？

情報の真偽にこだわっている場合ではない。

焼き肉を食べ終わってお店を出て行ってしまう前に、何としても駆けつけなければ！

「サインもらおうね！握手してくれるかなあ？」

宏代ちゃんも当然、一緒に駅までひとっ走りする物と思い込んで聞くと、このあと用事があるから行かれないと言う。

「サインもらって来てね！頑張って！」

取るものも取りあえず、ノートと鉛筆だけ持って、子供たちの集団に加わり走りに走った。

駅まで結構な距離があったので、休まず走っても 15 分はかかったはずだが、問題のお店の前に到着すると、先着組の子達が、「いるいる！」と口々に言っている。

半信半疑で、店の入り口のガラスドアの中を覗くと、なるほど本当に見慣れた顔の女優さんがいた。

こちら側に向かってテーブルに着き、お隣の人と話したりしながらお肉を焼いている。

焼いているんだから、まだまだ出て来ないだろうな。

知らない年下の子達と、お店の前で突っ立って待っていた。

すると、思いのほか早く、一行がお店から出て来たのだ。

子供たちはわっと女優さんを取り囲み、手に手に持っている紙にサインを書いてもらっている。

感心なことに、ちゃんと色紙を用意していた子が結構いたので驚いた。

あの短い時間で、どうやって調達したのだろう、と考えているうちに、私の番が回って来た。

ほぼ最後の方で、待っている子はちらほらしかいない。

立派な色紙と違って、使い古しのノートの紙面を差し出すのが、申し訳ない気がした。

ものをハキハキと言う習慣が身についていない小学生だった私は、サインを書いてもらってノートを手渡してもらったあと、お礼の言葉もモゴモゴと不明瞭なままに、ノートのページをめくって不躾な要求を述べる。

「もう一枚下さい。」

撮影終了後でお疲れの所だったろうに、女優さんは再び私の手からノートを受け取り、サラサラとサインをしてくれた。

宏代ちゃんの喜ぶ顔が浮かび、飛び上がりたいほど嬉しかったのだが、次の瞬間には胸が詰まってしまうのだった。

女優さんのきれいなお顔を真近に見上げて、ドキドキしていた私の目に、あからさまにしかめっ面になった表情が飛び込んで来たのだ。

「二枚も必要なの？」

ノートを返してくれる時には、ため息混じりにそう言っていた女優さんだった。

来る時とは打って変わって、帰り道は一人とぼとぼ歩いた。

手にしたノートは、大切な物の様でもあり、あまり見たくない物の様でもあり。

家に着くと、「サインもらえたの？」と母が楽しみに待っていた。

「二枚も必要なの？って言われた。」

自分の部屋で机に向かい、宏代ちゃんの分のサインを見つめた。

(ひろちゃん、頑張って行って来たよ。)

きれいな女優さんをムッとさせてしまった事が、悲しかった。

一緒に行かれなかった宏代ちゃんのために、勇気を振り絞ってお願いした事で、女優さんを怒らせちゃって、私も怒られちゃった。

なんだかやり場のない気持ちである。

こういうのをやるせないって言うんだろうな。

行き場の無い私の心。

解決策としたのは、女優さんのサインの紙の裏に、私のサインを鉛筆で書き込む事であった。

多少遠慮して、筆圧は軽めに。相当なくずし字である。

「私のサイン。わかるかな？」

などと添え書きして、次の日学校で宏代ちゃんに渡してあげた。

２２母と自転車と私

社宅から最寄りの鉄道駅まで、バスの路線があるにはあったが、遠回りのルートになっていた。

家からは、単純な一本道を辿れば駅までつながっているのだ。

そこで母は、日常の買い出しに中通り商店街まで繰り出すために、自転車を便利に使い始めていた。

買い出しに一緒に行きたがる小学生の娘のためにも、奮発して、新品の自転車を買ってくれた。

補助輪の音をガラガラガラガラ言わせながら、社宅の敷地内のアスファルトの道で、毎日の様に練習をした。

まっすぐ走る事が出来る様になると、補助輪付きでもお買い物デビューが許されるかと思われた。

ただ、颯爽と走る母の後ろから、娘が危なっかしくガラガラと着いて行く事態に、私は特に不都合を感じる事はなかったが、見栄っ張りな母にとっては、無論不具合なのであった。

買い出し同伴禁止令発令の後、じっくり月日をかけて練習し、ようやく補助輪から開放された私は、身も心も軽く、母と並んで自転車を走らせ、駅前の西友に向かっていた。

意気揚々と、西友の入口付近の自転車置き場に駐輪して、足取りも軽く買い出しに同行した。

帰り道にてくてく歩いたり、遠回りのバスに乗ったりしなくても良いのだ。

一直線に我が家に帰るのに、ものの１０分しかかからないではないか！と、ちょっぴりサバ読みながら意気込んで駐輪スペースに出て来ると、私の置いた場所に、自転車が無い。

母が止めた自転車の隣に私も止めたのだが、母の自転車の隣にあるはずの、赤い自転車は、なくなっていた。

駐輪スペースを見回すが、どこにも無かった。

私の身体の大きさにピッタリ合うサイズの、こぎやすい自転車だった。

何より、その日は補助輪を外せた後の、最初の外出の日なのだった。

「無いね。」

しばらくあちこち探していた母は、間もなくそう言って自分の自転車のスタンドを蹴った。

「歩いて帰りなさい。」

ノロノロ運転で進む母の後ろに着き、早歩きで歩いた。

鍵だ。

あの自転車には、鍵が付いていなかったのだ。

初めて乗ってお出かけした日に、いきなり盗まれてしまった訳だった。

赤い、乗りやすい、やっと補助無しで乗れるようになった私の自転車には、お別れを言う時間もなかった。

社宅は、駅の方面から幹線道路までの間を結んで新しく整備された、直線の道沿いに建っていた。

そのため、所々にある路地に入って行くと、細めの旧道に抜ける事が出来た。

旧道沿いを歩くと、小さな川が流れていて、道端の雑草も心地よく、古くからある文房具屋さんの佇まいも素朴で、時々消しゴムやシールなんかを買いに寄っていた。

一人で百円玉を持って行くこともあったし、宏代ちゃんと二人で行く事もあった。

旧道に沿って流れる細い川が、ほぼ90度進路を曲げる区域があった。

そして、曲がった川に沿う様にして、小道が伸びていた。

ちょうど川が進路を曲げるそのポイントの所で、一度宏代ちゃんと立ち話をしていた事があった。

細い道なので、ガードレールはなかった。

川の方で話していると危ないのでなるべく離れて、そこの角に建っていたいつもの文房具屋さんの壁に二人で並んでもたれて話していた。

ほぼ直角に曲がる川の水の動きが目の前に見下ろせる。

一旦、直進して来て勢いよく岸辺にぶつかった水が、もんどりうって慌てふためいた挙句、新しい方向へと吐き出されて行く。

次々と水が流れて来て、方向転換に苦戦している。

見ていてちっとも飽きなかった。

随分と長い時間そうしておしゃべりしていただろうか、旧道を、向こうから自転車に乗ったおじさんがこちらに向かって走って来るのが見えた。

そして私達が壁にもたれて足を投げ出し気味にしていた曲がり角を、自転車のスピードを緩めずに曲がって来た。

宏代ちゃんと二人、慌てて足を引っ込めたのだが、曲がり角の先はとても細い小道。

宏代ちゃんの足に、おじさんの自転車の前輪が接触してしまった。

あっと思う間もなく、おじさんの自転車はバランスを崩して、川の曲がり角の水の中に落っこちてしまった。

一瞬、反応出来ずに成り行きを見守ると、おじさんは何やらたくさんの悪態をつきながら、自力で自転車を道に持ち上げ、自らも陸に上がって、無傷で走り去って行った。

「びっくりしたねえ。」

でもおじさんが怪我しなくて良かった。事故になっていたら、それはそれは恐ろしかっただろう。

事故。

事故と言わないまでも、私もその後、文房具屋さんの前で、自転車で転ぶ事になる。

西友の駐輪スペースで盗まれた自転車について、ガッカリはしていたものの、未練たらしい事を言った覚えはないのだが、私は新しい自転車を買い与えられていた。

今度は身体の大きさにピッタリの物ではなく、成長後もしばらく乗れる様にと、少し大きめの物を与えられた。

大きめなので、足をスっと地面につく事が難しく、バランスを上手く取るのは難易度が高かった。

その新しい愛車で、いつもの文房具屋さんに、可愛いシールや鉛筆を買いに行った時の事だった。

お目当ての商品をゲットして、店を出て自転車にまたがり、こぎ出そうとしていた時、私とすれ違う形で車が通った。

狭い旧道で、車の幅は道いっぱいいっぱい、と子供の目には写っただろう。

私は大きめの自転車にまたがったまま、まだ走り出していなかったから、バランスが取れない。

足をつこうにも、車側についたらひかれちゃうじゃないか！

自転車から降りる空間的余裕も無く、私はバランスを崩して自転車毎倒れた。

ガシャン、と派手な音がして、私は自転車と共に文房具屋さんのガラス窓に突っ込んだ。

きっと車は止まってくれるはずだと、顔をあげて期待して見たが、車は何事もなかったかの様に、スルスルと行ってしまった。

お店の中から、おばさんが出て来たので、事情を話した。

怪我はなかったし、自転車も壊れていなかったが、文房具屋さんのガラス窓にヒビが入っていた。

私の手落ちで転んだのではないし、わざわざガラス窓をめがけて突っ込んだのでもないのだが、おばさんは、弁償、という言葉を放った。

親を呼んで来る様にと言われて、私は徒歩で一旦帰宅した。

ああもうおしまいだ。

大目玉を食らうだろう。そしてまた自転車とはサヨナラだ。

どこまで自転車に縁がなかったのだろう。

そんな事より、後でまたママに叩かれる。

頭かな、腕かな。この前は足だったな。怖いな。

恐怖で身もすくむ思いで、その後の運びはほとんど上の空だった。

夜になり、翌日になった。

何も起こらない。

身構えて過ごしていた私の、頭も腕も足も、叩かれる事なく、無事である。

拍子抜けした。

どんくさい娘のせいで弁償させられて、母は怒っているのではないのか？

私はそれからもしばらくは母の一挙一動に気を張って生活したが、どうも、今回の件に関して母は怒りを感じていない様だった。

今思えば、娘が車にひかれず、ガラスで怪我もせず、無傷であった事だけで、母は安堵したのかも知れなかった。

それはそうと、転んでショックを受けて呆然としている私に、「車のナンバーを覚えてないの？！」

とまくし立てたのは、母だったのか、お店のおばさんだったのか。

キーハンターのドラマでもなし、市井の小学生が、そんな芸当はやってのけられないだろう。

23はだかんぼうのヒーロー

お風呂上がりに髪を乾かす手順が、我が家では少しばかり面倒であった。

家庭用ホットカーラー機、という体の代物を使うのだ。

本来は、髪の毛にカーラーを巻き付けて、大きなビニールキャップをすっぽり被り、機械のスイッチを入れて風を送って使う物だ。

ホースを通ってキャップの中に温風が吹き込まれ、髪の毛をカールさせる仕組みで、母がオシャレをする時に良く使っていた。

我が家では、オシャレをする以外に、ドライヤー代わりとして使用していた時期があった。

お風呂上がりに、パッとキャップを被り、スイッチを入れて10分程じっといれば、髪が乾く。

当時は子供が片手で持つには重いドライヤーを、私が器用に扱う事は難しかったため、ホットカーラーのキャップに白羽の矢が当たったのだろう。

１０分間、キャップのホースに繋がれて自由を奪われるのだが、それはそれで面白がって、ブーブー言う機械音を鳴らしながらボーっと座っていたものだった。

ただ、キャップを被るまでの手間が意外と面倒くさい。

まず、鏡台の下の、ホットカーラー機の収納場所から、力を込めて取り出す。

次に、ケースの留め口を操作してケースを開ける。

ビニールキャップを取り出し、送風用ホースを取り付ける。

キャップを広げて、頭全体をおおうようにして被る。

機械のスイッチを押して、送風を開始する。

尚、この時、風の温度を設定する事が大事で、お風呂上がりで暑い時には、温風ではなく送風にする必要があった。

ある日の夜、私はいつもの様に、前述のヘアードライの儀式を執り行っていた。

すると、たくさんの手順を粛々と追っている私の目の前を、疾風のように駆け抜ける父の姿が目に写った。

2DK の狭小社宅の一室にはおよそ似つかわしくないスピード感を持って、父は私の目の前を走り抜け、窓際に置いてあった灯油ストーブに突進した。

何が起こっているのか全く理解出来なかったが、入浴後の父がはだかんぼうのままである事が、事の重大さを示唆していた。

脱衣所のスペースひとつ満足に確保できない、狭小の社宅であったからこその幸運とも言えるかも知れない出来事が起こっていたのだった。

入浴後、ダイレクトに廊下に出てバスタオルを使ったり着衣をしたりするのが習わしだった我が家で、その日も父はバスタオルで身体を拭こうとしていた。

廊下の先に、ダイニングルームが見えている。

父の目に写る、炎。

母が灯油ストーブの火の調整をしていた際に、すぐそばにあるカーテンに触れ、燃え移り始めていた瞬間だったのだ。

若かりし父は、身体が瞬時に反応して、バスタオルを振り落とす勢いで駆けつけ、見事、ボヤを未然に防いだのだった。

スーパーマンみたい。バスタオルのマントは落っこちちゃったけど。

取り乱して慌てふためいている母を尻目に、私は父への賞賛と尊敬の思いに酔っていた。

いつ何時も、的確な判断を下す父であった。

母が指に怪我を負った時も、父の判断は実に迅速だった。

休日のお昼ご飯に、ザルそばを子供に食べさせようとした母が、つけ汁のお出汁を取るために、鰹節削りの道具を使って鰹節を削っていた。

普段から鰹節を削る所を見るのが好きだった私は、その日も母の手元を興味深く観察していた。

母が鰹節を握った手を前後させる度に、鋭い刃で削られ、サクッサクッと清々しい音がして、木の箱の中に削り節が溜まっていくのがわかった。

いい匂い。

「お腹空いた～。」と思わず叫んだのだが、まさかそれを合図にした訳でもなかろうに、母が不意に鰹節を持っていた手を頭上に上げ、もう一方の手で押さえるような仕草をした。

鰹節は無造作に放り投げられた格好だ。

何事かと戸惑う間もなく、父が母に駆け寄り、事態を把握した。

「病院に行く。」と父。

「二人で留守番してなさい。」と右手を上げて左手で指のあたりを押さえたままの母。

まんじりともせず妹と二人、静かに待っていると、間もなく両親は帰って来た。

母は右手の指に、白い包帯をグルグル巻いていた。

この時になって初めて、(ママ、鰹節削りで、指を切っちゃったのか。)と気付いた。

それほどまでに、父の対応は迅速であった。

怪我は大事には至らず、外科的処置の必要はなかった。

ただ、出血がなかなか止まらないという事で、止血剤を打ってもらって来たという話だった。

９歳も年下の母が、父は可愛くて仕方がなかったのかも知れない。

心配でたまらず、タクシーで総合病院の救急外来に乗り付けたのだろう。

血液製剤を打ってもらった。

出血は止まった。

外科的処置の必要もなかった。

父は安心したであろう。

ただ、当時、血液製剤の安全性に関しては、まだまだ発展途上であったのだ。

トラブルを含み持っている血液製剤に当たってしまう確率は、宝くじに当たる事よりも滅法高かったのではないだろうか。

ガラポンで当たるなら嬉しいものの、母は、あろう事か、この時の止血剤によって、C 型肝炎という病気を引き当ててしまう事になる。

父が、母をこの上なく大事に思うあまりの尊い行動が引き起こした、現実なのであった。

24サイフォンの原理

父の会社の社宅は、敷地内に二棟建っていて、1号棟は13階建ての大きなビルで、立派なエレベーターを二基備えていた。

それに対し、私の住んでいた2号棟は4階建てで、エレベーターなぞは付いておらず、1号棟の裏に、後からひっそりと建てられ、日照権など元々主張する権利も与えられていないも同然の立地であった。

ビジュアル的にも、1号棟の陰に隠れているオマケみたいな2号棟だったが、こじんまりとして小さい分、入居者同志の距離は近くなり、顔なじみの人達がたくさん出来て、それは楽しい日常生活であった。

年齢的にも似たり寄ったりの奥様達は、顔を合わせればにこやかに挨拶を交わし、ウイットに富んだジョークを交えながらのおしゃべりに花を咲かせる。

そんな場面に私が居合わせると、ちょうど小学校の中高学年という微妙な年齢であった事もあり、大人達に無邪気に絡んで行く事は

出来ず、かと言って、ツンケンするのも無理があり、身の振り方にいつも困惑していたものだった。

結果的に、母の身体の後ろに何となく隠れるようなスタンスを取って、気配を消している事になる。

立ち話はたちまち井戸端会議へと発展して行き、所在無さげに突っ立っている私の立場は、ますます難解なものになって行く。

ひたすら俯いて、井戸端会議に決着が付くまで耐え忍ぶのが常であったが、「ではまた後ほどね。」というお別れの言葉の後に、必ずと言って良いほど、「お姉ちゃんは、本当に大人しいのねえ。」と付け加えられてしまう。

「私に似て内気なのよ。」と母が返すのも、飽きもせず毎度の事であった。

内気？内気ってなんだろう？

少しモヤッとしながら、まるで人生の難問を熟考するが如しに、舌の上で飴玉を転がす様に繰り返し考えていた、思春期手前のオタク女子であった。

仲良し奥様グループで、と言っても、窓からひょいと顔を出せば誰彼となく声をかけられて、顔を出さなくとも窓の下から大声で呼び出されて、２号棟裏の物置の前のスペースで、何かとイベントが組まれていた。

ある時は、バーベキュー大会。

お父さん達は出勤している平日に、昼間から一杯やっていたかどうか定かではないが、奥様達がチビッ子達を連れて、青空バーベキューを楽しんでいた。

思春期予備軍の私は、母に促されても、その場に行く事を断った。

留守番してる、と言い張り、母が届けてくれるお肉や焼きそばのご相伴に預かった。

焼きたてのアツアツ、とはいかない少し冷めた焼きそばを頬張ると、バターの香りが鼻をついて驚いた。

どこかのお宅の若い奥様が、焼きそばをバターで炒められる習慣なのかな。

よそのお宅の中の家庭事情を垣間見るのは少し恥ずかしい様な、後ろめたい様な気がして、底抜けに、美味しい！と感じられない自分を持て余していた物だった。

夏休みが来ると、大きなビニールプールが設置されて、子供たちが存分に水遊びを楽しむイベントもあった。

１階の我が家のお風呂場の小窓を開けてホースを通し、プールまで渡して水を張る。

花壇の縁に置かれたプールに、なみなみと水が溜まっていったが、飛び込んだ子供たちは、冷たい！と言って飛び上がっている。

さあ、水温を上げるためにどうしようかという話になって、様々な策が練られた。

やかんで熱湯を運ぶ、バケツリレーをする等、各々がワイワイ言っている。

すると、手にしたホースの先をじっと見ていた母が、黙ってトイレにでも行ったかと思ったらすぐに戻って来て、やおらホースを口にくわえた。

そこにいた人達の視線を独り占めしながら、渾身の力を込めて、ホースを吸い始めた。

思いっきり吸っては、息をつく。間髪入れず、また吸い付く。

何度繰り返していただろうか、「ペッ。」と言って母はホースを口から外し、プールの中に投げ込んだ。

見ると、ホースの先からはしおらしく水が出ている。

いや、水じゃない。お湯だ！

みんなが、歓声を上げた。

お湯が引けてる！どういう事？

魔法使いは因島の和子おばちゃんだと思ってたのに、まさかママも魔女だったなんて。

大袈裟でなくそのくらい驚いた。

タネを明かせば、母はさっき一旦お風呂場に行って、水道の蛇口にはめてあったホースを外して、温かい残り湯が溜まっている湯船の中に突っ込んで来たのだと言う。

そしてもう片方のホースの先をプールに放り込めば、浴槽より下の位置にあるプールの方に、お湯がホースを伝って流れ落ちて行くのだと言う。

ただ、それには条件があり、ホースの中を気密状態にしないといけない。

その為、ホースを吸ってお湯を導き、ホース内を水分で満たす事に成功したという事だった。

結果、浴槽との高低差が2～3m は優にあったプールをめがけ、我が家のお風呂の残り湯が延々と注がれ続けた。

原理的には、浴槽のお湯は残らずプールに流れ落ちた算段となる。

奥様方の賞賛の声に包まれ、嬉々として遊び始める子供たちの姿を嬉しそうに見やりながら、「昔、学校で習ったから。出来るかな、と思ってやってみたのよ。」

母はそんな風に言っていた。

後々になって、中学校の理科で習う、サイフォンの原理という物を実践したのだという事がわかった。

学校で習った事を、机上の事として済ませる事無く、日常生活の場面で実際に生かせるなんて、ママはすごい人なんだなあ、と漠然と思った出来事であった。

25金の指輪

幼い子供だった頃から、毎年お誕生日が来ると、「何が食べたい？」と母に聞かれた。

私は物心がついた時から、大のラーメン好きであった。

七五三でお宮参りに行く時に、正絹の着物を買って貰って着飾って出かけ、お参りの帰りにご飯を食べようという事になると、すかさず「ラーメン！」

着物を汚すのが関の山だから、今日だけは堪えてくれ、と寿司屋に連れて行かれる。

おめでたい日に華やかなお寿司とは、定石至極ながら、ラーメンへの執着は断ち難く、仏頂面でかんぴょう巻をかじって帰った。

風邪をひいて熱を出し、学校を休んで小児科に通院する日も、診察が終わった後にはご褒美の様に、帰り道にラーメン屋さんに連れて行って貰った。

その日も病院の帰りに、何度か行った事のあるラーメン屋さんに寄った。

母も私も、そのお店の醤油ラーメンがお気に入りで、二人して同じ物を注文した。

大食漢の子供ではなかったが、ことラーメンとなると、食べるスピードは遅いが、いくらでもツルツル吸い込めた。

「早く食べなさいよ。」麺をすする合間に母が言う。

「だって熱いんだもん。」

フーフー息を吹きかけながら、マイペースで麺を口に運ぶ。

(ナルトが乗ってる。メンマ美味しい。向こうはほうれん草か。)

湯がいたほうれん草がトッピングしてある部分に目をやると、何やら違和感を覚えた。

ほうれん草が茶色っぽい。

なんだろう？凝視しているとやがて全貌が浮かび上がった。

立派な蛾の成虫が、両羽を広げた形でほうれん草と一緒にスープに浸かっている。

「虫がいるよ。」

何故だか落ち着き払って母に報告をすると、母も慌てず淡々と店主に知らせる。

恐縮したおカミさんは、替えの新しいラーメンを作って持って来てくれたが、呑気な私は、蛾に気付かないままに6～7割は食べ進めてしまっていたのだ。

お腹のスペースは残っていなかったと思われるが、熱々の大好きな醤油ラーメンのリベンジは、ラーメン狂の私にとっては、願ってもない幸運だった。

ショッキングな、蛾の混入という事実にも怯まず、7割方平らげ、タダで出された二杯目もペロリと食べて行った親子。

見方によっては、虫です詐欺親子の様にも思えて来る。

そんなラーメン狂だったが、お誕生日のメニューのリクエストに、ラーメンを挙げた事は不思議と無い。

母の作ってくれる、スパゲティミートソースが私は好きだった。

甘めの味付けが、子供心をくすぐり、食べた後の満足感も格別だった。

「ミートソース！」

リクエストの質問に答える私に、(またか。)とも(やっぱりね。)とも取れる、ニヤリとした表情を残して、母は調理に取り掛かっていた。

小学校中高学年ともなると、親の行動を冷静に観察する力も育って来るのか、私は、一連の調理を終え、娘に食べさせた後、洗い物を済ませる母の後ろ姿を見ていた。

食器類に加え、鍋やザルなどを洗い上げ、水を切る母。

(子供にご飯を食べさせるのって、大変な仕事だなあ。)

しかも仕事は毎日毎日休み無しだ。

母の左手の薬指にはいつも、金の指輪がはまっていて、日々の大変な仕事を母と一緒になって苦労してこなしている様だった。

泡にまみれ、水にさらされ、日に照らされ。

そのゴールドの指輪が母の手と共にあるのを目にする度、何故だか私の気持ちはふさいでいった。

大人って大変だ。私、子供で良かった。

26笹の葉

小学3年生の年度開始と共に転校をした私であった。

右も左もわからぬ新しい学校の新３年生のクラスで、様々な取り決めをする為の学級会が連日行われた。

色々な委員を決めて行く中で、立候補者が積極的に名乗りを挙げて、日々順調に会議は進んでいた。

最後に残った、学級委員の枠組みで、クラス全員がシーンと黙り込むまでは。

それまで活発に手を挙げていたクラスメイト達が、急に静まり返って、進行役の日直さんの声が虚しく宙を漂っていた。

「立候補する人はいませんか？」

「推薦する人は手を挙げて下さい。」

スイセンって何だろうか、とぼんやり考えていると、３列前の席の古山さんがいきなり振り返って私を見た。

(誰か、古山さんを呼んだ？)

謎に思って、私も後ろを振り返って見ようとした時、一瞬微笑んだ様に見えた古山さんが「はい。」と言って手を挙げたので、クラスの皆の注意もそちらに向いた。

古山さんは、私の苗字を述べて、「吉川さんがいいと思います。」ときっぱり言った。

(いきなり何？何が、いいんだろう？)

意味が全く分かりません！と疑問をぶつける相手がわからず、誰も異論を唱えてもくれず、私は学級委員のポストに都合よくはめ込まれてしまった形になった。

古山さんは、私の転入直後から随分と優しくしてくれていて、陶芸教室を営んでいたお家の、工房の部屋にも出入りさせてくれ、陶芸の先生であるお父さんに紹介をしてくれて、小さな陶芸の作品をお土産に持たせてくれたりしていた。

貝殻を模した白い陶器のかけらを、可愛い小箱に詰めて渡してくれたのが、私は嬉しくて、それから毎日の様に、箱から出したり入れたりして眺めていた。

古山さんは、他の子達より少し身体付きが大きくて、成績も良くしっかりしていて、先生とのやり取りなどもソツ無くこなすタイプだった。

自分がスイセンされない為には、都合の良い誰かをスイセンするのが鉄則、という真理を心得ていて、着々と準備を進め、機を逃さず実行に移す力を備えていた、やり手の小学生だったのだ。

一方、黒いランドセルを背負って鎌倉の学校から転入して来た子は、おとなしくてあまり喋らず、やりたいのかやりたくないのか、自分の気持ちも表に出さず掴みどころのないタイプ。

来たばっかりでアウェイな所をどさくさに紛れてターゲットにされているのに、顔色ひとつ変えず呑気な物である。

皆、遠巻きに様子を伺っていた。

与えられたポジションの居心地の悪さにスポットを当て続ける程の集中力や持続力を全く持ち合わせていない私は、学級委員なぞという肩書きを他人事の様に遠くに聞き、感じていた。

表情一つ変えず向き合っているとも見えるその姿に、この子は満更でもなさそうだと、クラスメイト達はまんまと合法的に責任逃れを果たし、皆がホッとしていた。

一学期も終盤となる、ちょうど梅雨の頃だったか。

朝の校内放送で、学級委員向けの放送が流れた。

「七夕の笹を昼休みに配りますので、各クラスの学級委員は取りに来て下さい。」

寝ぼけた頭で聞いていたので、自分が行く訳だ、と即座には気付かなかった。

反応の薄さを憂いた近くの子が助言をしてくれ、(昼休み、笹、取りに行く。)と脳に書き込んだ。

給食を時間内に無事食べ終えて、友人達と梅雨の晴れ間の校庭に出て遊んだ。

貴重な青空をたっぷり味わって、自然と笑顔になっている時間。

(ああ、楽しかった～。)と教室に戻ってみると、キツい目をして女の子達が咎めて来た。

「うちのクラスの笹は？！」

目の前が真っ暗になった。

慌てて走って取りに行くと、たった一本、元気の無い笹がぽつねんと残されていた。

贔屓目に見ても、見栄えのしない余り物。

「福がある」と切り返すのは、一休さんでも無理があると思われた。

あの時はさすがに凹んだ。

皆に悪い事をしたなあ、と心が傷んだ。

ただ、次期からはもう二度と、学級委員にはスイセンされない様になったのだった。

27ぼくとつ

布団干しをマメにしていた母だった。

お天気が良い日には必ず、ダイニングキッチンのベランダの柵と、隣室の居間の窓の柵とに、家族全員分の布団をずらりと並べて干していた。

気持ち良さそうな日の光をさんさんと浴びながら、眩しげに目を細めて、布団を持ち上げ次々と干していく母の姿を、我が家のベランダの真下に設置されていたブランコに乗って座りこぎをしながら眺めるのは、とても楽しい気分だった。

我が家のある2号棟の前方には、高層の1号棟の建物がそびえ立っていて、2号棟の住民の眺望は妨げられざるを得なかったが、全体に渡って被って建てられていたのではなかったので、半分くらいの世帯からは、1号棟に遮られる事なく、前を通る二車線の道路と、きちんと段差の付けられた歩道とを見る事が出来た。

お天気の良い日、季節は春だ。

母は気持ち良くお布団干しに精を出していた。

ふと、前の歩道を歩いている人物に目が止まる。

かなりの距離があるので、小さくしか確認できないが、母は、その人物が誰であるかを疑いもなく確信していた。

歩き方と、姿かたちですぐわかったと。

私が学校から帰って来ると、待ちかねた様に勢い込んで報告して来た。

「笠智衆さんが歩いてたのよ！その前の道！」

重鎮の俳優さんは、その界隈にお住まいで、現在は大学のキャンパスになっている、当時の撮影所まで徒歩で通っていらした様だ。

あるいはオフの日であったのかも知れないが、朴訥とした生き様をそのまま表されている様な足取りだったと、母は感激しきりであった。

「ほら、『男はつらいよ』に出て来てたでしょ！御前さま。お正月に映画観に行ったでしょ！」

はあ、そういう話か。

あの御前さまが歩いてたのか。

すると、お坊さんの袈裟ではなくて、私服に身を包んだ俳優さんが、少し背を丸めて、ゆったりと歩いて行く姿が目に浮かぶ様だった。

別の日も、ルーチンの様に母はお布団を干す。

お隣の部屋の奥さんが、たまたま前を通りかかったそうだ。

ベランダの前で立ち止まり、「やったね～。」としげしげ見ながら奥さんが言った。

怪訝に思った母が、その方の視線の先に目を落としてみると、思いもよらぬ事態が起こっていた。

大きく立派な地図が出来ている。

私が学校から帰るのを待って、母は嘆いた。

「まさかおねしょの布団干してるとは思わなかったわよー。」

「それもお姉ちゃんの方よ！」

「なんで言って行かないのよ？！」

私は小さくなってひたすら恐縮している。

朝、自分でも恥ずかしくて情けなくて、何より自分自身信じられなくて、言えなかったのだ。

お布団干しが好きな母のおかげで、さっぱりと乾いたお布団で、その夜も眠ることが出来た。

28何の涙？

朝起きたら、母が泣いていた。

子供が泣くみたいに、「ええん、えんえん。」という風な、いわゆる嗚咽の様な声を押し殺しもせず、涙が出るに任せてきっちり泣いている。

嗚咽を漏らしながらも、手は動かして働いており、いつも通りに朝ごはんを作って子供達に食べさせ、学校に送り出す。

子供達は、もちろん大いに違和感を感じていた。

とりわけ私にとっては、えんえん泣くのはいつも私の方なのに、立場が逆転して母が泣いていて、私は泣いていない。(不思議な感じ。)と思っていた。

さて、普段通りに学校で放課後を迎え、家に帰って来るのだが、「ただいま。」に返してくれる母の「おかえり。」が聞こえない。

部屋に入るとようやく母の声が聞こえたが、驚いた事に、朝聞いた嗚咽の声がそのまま再現されている。

(朝からずーっと泣いてるの？)

むしろ母が朝に泣いていた事なんておおかた忘れて帰宅しただけに、予想もしなかった事態を目の前にして、数時間前の母の異変

が現実に起こっていた事なのだと改めて思い知らされ、驚きと強烈なショックを覚えた。

おやつを食べたり、形だけピアノの蓋を開けて練習のフリをしたり、洗濯物を畳むお手伝いのアピールをしたりしている間も、母の嗚咽が BGM の様に聞こえている。

何かの演技でもしているのかと疑って、母の顔を見ると、クシャッとした泣き顔とは違って、どちらかと言うと目を虚ろに開いた無表情に近かった。

無表情のまま、嗚咽が口から漏れて、大量の涙が後から後から出て来るという状況の様だった。

「真面目に練習しなさい。」

「宿題しなさいよ。」

「丁寧に畳みんさい。」

その他数々の注文を言い付けて来るはずの母の口が、機能不全に陥っている。

様子を伺っていた私だったが、その状況が二日続くとさすがに不安になり、自分からは珍しく、母に言葉をかけた。

「どうしたの？」

「なんで泣いてんの？」

「ねえ、なんで泣いてんの？」

母は聞こえていないはずはないのに、無視である。

と言うより、涙を止める術を見失ってしまっている様だった。

とうとう三日目に入った。

嗚咽も涙も衰えるところを知らない。

どうした物かと考えあぐねながら母を遠巻きに観察する事しか出来なかったのだが、夜になって父が帰宅すると、正に三日ぶりに母が嗚咽以外の声を発するのを聞く事が出来た。

父に対して、何か訴えている様だ。

注意して聞いてみる。

謝っている様な父の声。静かな声だ。

それに続いて、嗚咽混じりの母の声。

「もうあんな事言っちゃダメよ。」

「うん。」とか「わかった。」とかいう内容の、父の返答。

翌朝からは、母の嗚咽も涙もきれいさっぱり消えて無くなった。

私には訳を話してはくれなかったが、一体父との間に何があったのだろう？

どんな事を言われて、三日三晩涙が止まらなかったと言うのだ？

私は本気で母を心配して、言葉をかけたのに、見事なまでに相手にもしなかった母であった。

夫婦の事情で子供に余計な心配をさせたくない、という考えが働いていたのかも知れないが、そうだとしたら一体どこまで立派な、親のかがみの様な人だろう。

ただし、娘としては、出来れば、泣いている訳を少しでもいいから教えて貰いたかった。

あの時勇気を出して母に言葉をかけた時は、きっと私の中では、母は母であると同時に、一人の、ヒトであったのだろう。

(訳を聞かせて。何が悲しいの？何か私に出来ることはないの？)

しかしあくまでも母は母の立場を死守したのだった。

守られた立場だったとも言える私だが、一方で、母に信頼して貰えない、取るに足らない、存在価値の危うい自己イメージが形作られる、基礎的な体験をしてしまったのかも知れなかった。

29伏線と回収

母が三日三晩泣き続けていたのは、私が小学校の中学年くらいの時だった。

結局、事の詳細は知る由もなく、いたずらに時は流れ、記憶自体も薄れて行った。

しかしそれから十五年余りが経った後、決定的な出来事が起こり、いやでも当時のエピソードを思い出し、結び付けて考えさせられる事態となった。

私は、就職をして経済的に自立し、なおかつ、まもなく結婚をして新たな人生のスタートを切ろうとしていた。

そんなある時、母が私の部屋にいきなり飛び込んで来た。

目に涙をためている。

「じゃあ、二人で家出て、アパートで暮らそうか？」

唐突にそんな事を口走った。

だが、私にはわかっていた。

階下の居間で、さんざ父親に責め立てられて来たのであろう。

私が学生生活を終え、家を出る方向に動き出した頃から、父親があからさまに機嫌を損ねる回数が増えて来ている事には気が付いていた。

面と向かって娘には話をして来ないものの、その思いの強さは滲み出ており、いやでも伝わって来た。

長子のお前が家を出て行ったら、この家の跡継ぎはどうなるのだ。

弟の所の息子に、吉川を継がせるなど、とんでもない事だ。

親父は、長男のこのわしに家を継がせる為に、この鎌倉の家を丸ごと残してくれたのだ。

今更、跡継ぎ不在などと、弟達に言える訳がない。

親父の世話を放っぽり出して施設に入れた挙句、娘に跡継ぎの婿の一人も取らせられない無能な妻だとは思わなかった。

日頃から父の怒号は家中に響いていたので、言い分はそのあたりの内容だったという事は承知していた。

しかし、長子が女子であった事も、家を継ぐ婿を取らない事も、結婚して家を出て行く事も、私には何ら非のある事ではないと思われた。

父が長男として生を受けた事を含めて、全ての事は、誰の責任でも非でも有り得なかった。

その様な事で、母や、娘である私を責め立てるという行為は、稚拙で、人間として恥ずべき事ではないのか？

強くそう感じた私は、父を避ける様になっていた。

着々と、自分の人生の青写真を写し出し、力強く歩み出そうとしていた時に、母が飛び込んで来た。

「じゃあ、二人で家出て、アパートで暮らそうか？」

父に、出て行けと言われたのだろう。

諸悪の根源である、女子の長子と一緒にまとめてわしの目の前から消えてくれ。

その流れを受け、母の言葉の冒頭に、「じゃあ、」という前置きが付いた訳だ。

跡継ぎの男子を産まなかった役立たずの嫁の存在価値など、無いに等しいという見解を、結局父は長年持ち続けて暮らして来たのだ。

全てを理解していて、母の立場の理不尽さにも思いを馳せた上で、私は母に言葉を返した。

「何言ってんの？私関係ないでしょ。」

「でも、パパが…」

続きは聞きたくない。

泣いている母に強い調子で畳み掛けた。

「ちゃんとやってよ。夫婦でしょ。」

しばらく黙って立ちすくんだ後、母はそのまま階下に降りて行った。

(今更、助けを求めに来るなんて。)

私の頭に、十五年余前の、あの場面が蘇った。

どうしたの、なぜ泣いてるのと問いかける私に、何も話してくれなかったじゃないか。

私の事は信用していなかったのではなかったのか。

私がどれほど寂しく、口惜しい思いをしたと思ってるんだ。

私は私の道を、自分で歩いて行くんだ。

その日の出来事は、一日も早く家を出たいという思いを決定的にする結果となり、そもそもそのつもりはないが、ますますこんな家の名前など継ぐ気は全くもって持てないと考える様になって行ったのだった。

～母を見送る～

30重いテーマ

「私が死ぬのはいいのよ。それよりパパの事が心配なのよ。」

私が運転する車の助手席で、母が語っていた。

何気ない普段の雑談めかしておきながら、いきなり重いテーマに関するコメントを聞かされたものだから、私は少なからず面食らっていた。

死ぬ？　母が？

ええと、話の脈絡はどうなっていたんだっけ。

黄色から赤に変わった信号に気を留めつつ運転操作を行いながら、脳内は混乱し、高速でつい先程の母との会話の記憶を手繰り確認した。

確か、こんな風だったはずだ。

娘「最近は、病院はどんな感じで行ってるの？」

母「総合病院の方は、来月行けばいいのよ。インターフェロンは近所のクリニックでやってもらえるから。」

娘「インターフェロンは毎日受けに行ってるの？」

母「一日おきよ。」

娘「総合病院の方の主治医は、どう言ってるの？」

母「なんも言われないのよ。」

娘「もう入院とかしなくていいの？」

母「クリニックに通ってくださいって。」

娘「それ、もうサジ投げられてるんじゃないの？」

思い出した。

私のこのセリフの後に、冒頭の母の重いテーマの発言が続けられた運びであった訳だ。

失言だったかな。

サジ投げられてるなんて、ひどい事言っちゃったのかなあ。

でも、父からは母の病状がそんなに悪化してるとは、何も聞いていないし。

年子で子供を次々と授かり、育児休業もそこそこに職場復帰をして、日々てんてこ舞いに忙しかった私は、その日は久しぶりに母に会ったのだった。

普段から父とは連絡を取り合う習慣が無いため、母の闘病の進捗については、日常的には報告を受ける機会がなかった。

それでも、こうして顔を合わせると母の口から報告を受けたり、実家に顔を出して直接会えば、父からも母の治療状況を教えて貰うことは出来た。

母の闘病は、離れて暮らす娘の想像を遥かに超える程の壮絶な物であろう事は、残念ながら想像する事が出来た。

その日は確か、母の体調が良かったので買い物に行きたいという話があり、たまたま私がお供をした様な形であった。

嫁いだ娘にたまに会うという事は、母にとっては嬉しい事であったと思う。

買い物を済ませ、雑談に花を咲かせながらの帰り道。

普段の闘病の様子を知らない、嫁いだ娘を相手に、母は明るい口調で終始おしゃべりを楽しんでいる様だった。

ところが、ふとした言葉尻に、母は自分の病気がかなり悪い状況になっているのではないか、と、探りを入れて来ている様なフシがあった。

「パパから聞いてない？」

「パパ、何も言ってなかった？」

娘の表情の小さな変化も見逃すまいとでも言う様な、まっすぐな視線で聞かれると、こちらも何となく緊張して来る。

もしかして母のガンは、随分悪いのだろうか？

指の怪我の止血のために、当時で15年程前に受けた血液製剤から、C 型肝炎のウイルスに感染し、皮肉にも順調に発病した母であった。

さらに残酷にも、体調不良で受診した時には、肝炎から肝硬変へと進行してしまっており、治療を施しても病巣は消えず、更に肝臓ガンへと進行していた。

母の為に何もしてあげられない自分を、多忙な日々を送る中でも、心に刺さったくさびのようにいつも後ろめたく感じていた。

母は、娘が父親と連絡を密にして、母の病状について良く知らされている可能性について勘ぐっている。

その上で、娘が取るべき態度は一つであろう。

母の心配、不安を一気に吹き飛ばしてあげる事だ。

娘がこう言っているのだから、大丈夫だろう、自分の取り越し苦労だった。と肩の荷を下ろして貰う事。

母との会話で、病気についての核心に近付いて行くに連れ、その考えは私の中で大きな信念となった。

実の娘が、死にゆく定めの母親に向かって、「サジを投げられてる。」なんて言う訳がない。

ああ良かった、やっぱり考えすぎだった。

母には、そんな風に感じて貰いたかったのだが、私にとっては意外な反応を母は示した事になる。

「投げられたんかねえ？」とクスッと笑って、「私はいいのよ。」

それより残される連れ合いの事を既に心配していた訳であった。

現在と違い、余命告知などは、当時はまだ当たり前ではなく、父親はひた隠しに隠して、親類などにも知らせていなかったのだった。

どこから母の耳に入るかも分からない。

父は徹底した対策を講じていたのだが、母は察していたのだろう。

心の中が全て顔に出る様な、実直な父であったから。

３１ひねくれ者

年子で、続けて三人の子供たちを授かっていた私は、ありがたい事に出産にあたって大きなトラブルはなく、三人目の時などはお産が順調に進み過ぎて、分娩室への到着を待たずして産院の廊下で生まれ落ちそうになる勢いであった程だった。

その末っ子が、生後3ヶ月を迎えた頃のある夜、すこぶる珍しく、父からの電話が入った。

携帯電話なるものは一般人にとってはまだまだ絵に描いた餅であった時代、赤子の授乳やオムツ替え、沐浴まで一人でこなし、オマケに、育児休暇期間中という訳で保育園への入園措置が切られてしまった上の子達の食事やトイトレ、外遊びの時間の確保なども私の肩にのしかかって来ていた日々での、とある夜。

突然鳴り響いた固定電話のベルに、不思議なことにちょうど手が空いていた私は、受話器を手に取りやすい場所にいて、１～２回の呼び出し音の後、電話に出る事が出来た。

父の声が電話の向こうから聞こえて来た時、一瞬頭の中は混乱して気持ちはひるんでいた。

母の身に、何か変化があったのではないか？

そんな私の動揺に気付く由もなく、あるいは気付かないふりをしていたのか、構わず父は喋り続けた。

「あと三日後に、みち子は亡くなるんだ。」

意識して力強い声を発しているのかとも感じられる、元気な声だ。

娘にこんな事は知らせたくない、しかし現実は知らせなくてはならない。

苦しいジレンマの中、その役目を果たすのは自分だけなのだという自信の様な雰囲気を、父の声や語り口から、私は瞬時に受け取っていた。

私に電話などかけて来る事は皆無であったのに、初めてかけて来た内容を聞けば、三日後にうんぬん、とはなんという侮辱！

根っからのひねくれ者である私は、知らせてくれた有り難さより、自分の価値観とあまりにもかけ離れた父の在り方に、腹を立てていた。

この人はいつもこうだ。

あと3日で亡くなるって言ったって、3日で一体私たちに何が出来ると言うのだ！！

いつもワンマンで、人の言葉に耳を傾けた事など一度もなかった。

自分のやりたい様にことを進め、文句のある人間は切り捨てるくらいの激しさと冷たさを持って、厳しい社会を乗り切って来たのであろう父だった。

それは身に染みてわかっていたが、今回は家族に関する事だ。ましてや、あなたの妻であるだけではなく、私の母の生き死にに関する内容だ。

なぜもっと早く、知らせてくれなかったのだ。

残された余命を、家族での温かい思い出で満たしてあげる事が出来たのではないか？

いくらなんでも三日間では、何一つしてあげられないではないか！

父は一体どういう了見でいるのか、理解に苦しむばかりで、心は乱れる一方。脳内は、前述の通りに取り乱していた訳であるが、実際には私はその醜態を一切表には現さない。

声色一つ変えず、落ち着き払ってこう言ったのだった。

「知ってたよ。」

そして、少なからず驚いて言葉に詰まっていたと思われる父に向かって、

「今まで何もお手伝い出来なくて、ごめんなさい。」

と、今度は私の方がお腹に力を込めて、はっきりした声で言い放った。

もちろん、本当は知ってなんていなかった。

お手伝い出来ないのは本当に心苦しかったけど、実際日々忙殺されて、気持ちはあっても身動きが取れなかった。

母が入退院を繰り返している事は聞いていた。

二人目の子供が生まれた時などは、生後二ヶ月くらいの時に、思い切って車を運転し、入院中の母に会わせに連れて行った事もあった。

母はそれは喜んで、大切そうに赤子を抱いて、いつまでも愛おしそうに見つめていたっけ。

そんな楽しい思いを、たくさんたくさん共有したかった。

子供の頃、散々わがまま放題をやった事への、罪滅ぼしの様な気持ちもあったと思う。

入院前の母とは、お座りが出来る様になったばかりの長女を連れて実家にしばしば顔を出しては、穏やかな時間を一緒に過ごしていたものだった。

それなのに、３日？３日後って？

その電話を、どんな言葉で切ったのか全然覚えていない。

ベビーベッドでぐずり始めた赤子のそばに歩み寄り、いつもの様にお世話をしながらも、「３日間」という言葉が、いつまでも頭上にグルグル回り続けている感じがしていた。

みんなはどうなんだろう？

母の近親者もみんな、知らされていなかったのだろうか？

桂子おばちゃん、和子おばちゃん、すみ子おばあちゃん。いとこたち。

妹。妹はどうなんだろう？

混乱仕切った頭で、私はテーブルに書類を広げた。

育休終了を控え、職場に提出する書類作成のミッションがあったのだ。

心臓の音がドキドキと鳴り響いている様な感覚の中で、正座をして、敢えて冷静に事務的な作業に身を投じる。

人間の、自衛的な性に典型的に支配されるに身を任せて、何とかやり過ごしたとしか考えられない一夜であった。

32泣き言

鎌倉の実家のお隣さんは、手付かずの雑木林がどこまでも延々と広がっている様な土地だった。

二階の座敷の窓や、庭のフェンス越しにつくづく眺めても、人の気配ひとつ感じる機会のない林が広がっていた。

必要以上に人の手が加えられていない自然空間は、少し怖い様な気もして、妹と戯れにバドミントンをしてシャトルがお隣の敷地に飛んでいってしまった時など、フェンスを乗り越えて、我が家の庭より少し低くなっていた土地に飛び降りる事が、意外に勇気を要したものだった。

さて、その日私は、固定電話の子機を握りしめて、二階のトイレにこもっていた。

座敷の並びに作り付けられたトイレだったので、窓の向こうにいつも通りの林が、すました顔で秋の風を吹き抜かせているのが感じ取れる。

ところがその日の私には、見慣れた木々の風景を見下ろすだけの心の余裕は全く持てていなかった。

子機で電話をかけた相手に対して、次から次へと、心に溢れかえった泣き言を、吐き出し続けていたのだった。

母が息を引き取るまで、自分には数日間しか時間が与えられなかった事。

母が最期まで苦しみ抜いて闘った病室で、いよいよ意識が遠のいていく母の耳元で、逝かないで、帰って来てと自分一人がいつまでも叫んでいた事。

とうとう慰安室へと運び出されて行った母の病室に一人残され、戸棚の中の私物を回収して来るようにと言われ、たった一人、今の今までここで頑張っていた母の身体の重みの跡が生々しくシーツのくぼみに残っているベッドのそばで、動けずにずっと佇んでいた気持ちの事。

医師による、臨終確認を聞くなり、やおらメモ用紙を取り出して、遺族にあれこれ買い物の指示をする伯母に違和感を覚えた事。

病室の私物に関する最終確認の役目を私に指示したのも伯母であった。

嗚咽を漏らしながらも、尚もトイレの中から発信される泣き言は続く。

あの時ほど、伯母を強い人だと思った事はなかった。

脱脂綿、白い布、ガーゼなど、仮通夜に早々に必要になる細々とした物の準備の割り振りを、冷静に伯母は行っていたのだ。

まるで鬼の様な人だと心から感じた。と。

それもそのはず、知らされていなかったのは私だけで、ほかの親戚は全員、だいぶ前から母の余命について承知していたのだ。と。

学生時代から、姉妹の様になんでも話し、お互いに励まし合いながら付き合って来た親友の麻衣子ちゃんは、長々と、私の突然の泣き言に耳を傾けて、親身になって聞いてくれた。

麻衣子ちゃんの母親も、その5年ほど前にご病気で亡くなられていた。

「母親を病気で亡くすなんて、私だけで十分だと思ってた。」

麻衣子ちゃんはそう言って、一緒に泣いてくれていた。

一時間近く、そうしていたのだろう。

一旦辛さを訴え終えた私は、子機を充電台に戻して、親戚が集まっている階下に降りて行った。

「何をトイレで話しとったん？

さっき探しに上に行ったんよ。」

伯母がすかさず話しかけて来た。

「誰も教えてくれんかった言うて、わあわあ泣いとったんね。」

心のバランスを保つ事に、全神経を集中させていないと、その場にいる事さえ不可能になってしまうであろう私は、たまらず、いとこの知恵ちゃんに言葉をかけた。

「ちょっと相談したい事があるんだけど、二階の部屋に来て貰える？」

親戚の皆さんの食事の準備などで忙しく立ち働いている知恵ちゃんは、子供の頃から変わらず、気配りの出来る根っからの働き者だ。

それでも、私の切羽詰まった顔色を見て、「ええよ。すぐ行くわ。」

そう言ってくれた。

33華族

知恵ちゃんに来てくれる様に頼んだ二階の座敷で、窓辺の壁に背を沿わせて力なくもたれながら、私は畳の上で膝を抱え、少し崩れた体育座りをして待っていた。

知恵ちゃんがここに来てくれても、私はちゃんと筋道を立てて話が出来るのだろうか？

忙しそうにしていたから、まだしばらく来ないだろう、その間にちょっと話す内容の整理をしておこう。

いやそもそも、起こった出来事を聞いてもらったとして、私の気持ちはわかって貰えるのだろうか？

わかって貰えるように、私は上手く話せるだろうか？

考えがまとまらず、ふと首を後ろに回して窓の外を見た。

二階の窓から見ると、木々の彼方に小さく、素朴な建物を確認する事が出来るのだ。

平屋と思われる、何の変哲もない、むしろ雨風に耐えていられるのが不思議になる様な、こじんまりとした日本家屋に見えていたそれは、当時は知らなかったが、後から聞いたところによると、当時でも300年以上前に、天皇の息子さんが(皇子様！)、京都の西賀茂の里山に建てられた別邸の離れだったそうだ。

皇族の皆様が、かの山荘でしばしば茶会を楽しんでおられたという、やむごとなき建造物であったのだ。

私が生まれる数年前に、京都から鎌倉のお隣さんの土地に移築され、私が二歳になる年には、国の重要文化財に指定されたそうだ。

茅葺き屋根の、田舎家風の作りながら、庭石や枯山水なども共に移され、元通りに配置され、江戸初期の朝廷文化を継承する文化財として、現在では雑木林に人の手が入り、遊歩道なども整備されて、有料で公開されている様である。

その様な珍しくも有難い文化財に背を向けて、半ば不貞腐れていた私の前に、間もなく知恵ちゃんが姿を現した。

窓辺にだらしなく座る私の姿を認めると、黙って座敷に入って来はって、はすかいにスっと正座しはった。

背筋をピーンと伸ばして座らはって、これ以上美しい正座の姿勢はあらしまへん。ほな、ご相談とやらを伺わせて貰いましょか。という様に、清らかな視線をまっすぐに私に向けはった。

知恵ちゃんは、亡き母や桂子伯母と同じ瀬戸内産まれで、京都で育った訳でもなんでもないのに、何故だかこの時に限っては、はんなりの中にもピリリとしまる、折り目正しさの様なオーラを全身から放ってはった。

知恵ちゃんからの視界には、私の後ろのガラス窓いっぱいに、お隣さんの土地に広がっている見事な林の木々が見えていたはずだ。

そして無意識に、かの山荘も目に写った事だろう。

「知恵ちゃんもずっと前から知ってたんだよね？うちのママの事。」

思い切って私から話を切り出した。

「知っとったよ。」

「みんなが知ってたみたいよねえ。」

「・・・」

「みんなが知ってて、私が知らなかったいう事もショックだったけど、妹が、妹までどうして教えてくれなかったのか、どうしても分からないんよ。」

「・・・」

「本人にも聞いたんだけど、父から口止めされてたからって。

でも私にはどうしても分からないんよ。

姉妹なのに、私たちの母親の事なのに、口止めされたからって、言いなりになる？」

悲しみと悔しさと怒りの感情が湧き上がり、涙を隠しきれずに訴えた。

「ふうん。」

知恵ちゃんにとっては、私の訴えの内容は何ヶ月も前からとっくに承知していた訳なので、何も今更驚く様な相談でも告白でもなかった。

私は涙を拭いながら、知恵ちゃんのリアクションを仰ぎ見た。

言うべき言葉を探している様な、気の抜けたような相槌を打ったあと、知恵ちゃんは再びグッと背筋を伸ばして、正座した膝の上に揃えた両手に心持ち力を込める様にして言った。

「とこちゃんが教えてくれなかったいう苦しい気持ちはわかるよ。ウチも二人姉妹やし。」

「ほんでも、みっちゃん叔母ちゃんが産んでくれた、この世にたった二人の姉妹なんじゃけ、仲良うやっていかにゃいけん思うよ。」

たった二人の姉妹。

母が産んでくれた、この世にたった二人の姉妹だよね。その通り。

そのたった一人の妹に、こんな大事な事を隠されていたんだよ。

そんな大事な時にこそ、姉妹や家族の絆を強く固めて、後悔の無いようにするのが本当なんじゃないの？

母は一体、幸せな最期だったと言えるのか？

一分の迷いもない知恵ちゃんの瞳が表す、揺るぎない正義の様な物に強く押されて、私は自分の胸の中でしか、思いを話すことが出来なかった。

「わかった。そうだよね。」

急に聞き分けの良い年下のいとこの面を被ったかの様にうつむき、ありがとうと礼まで口にした。

「落ち着いたら下に降りて来んさいね。」

「うん。」

こんな時でも、家族、親族の前では取り乱す事は許されないのだ。

心に重い蓋をして、真の思いや望みや疑問は、表になど出す物ではないのだ。

まるで、華族って感じだ。

誰一人、自分に正直な者などいない、皆が仮面をつけていつも穏やかで平和な、華族。

やむごとなき人々の集まりには、私は溶け込むのはお断りだと思った。

背筋を伸ばして正座をして、300年前の歴史と対峙していた知恵ちゃん。

華族の日常を波立たせる物ではない、と迷いもなく私に説教したのは、古の京の都からさまよい来ている、皇族たちの魂だったのかも知れない。

34弾ける花

いとこの知恵ちゃんが言った事は本当だった。

母の位牌が収められたお仏壇の前で、思い出話をする相手は、いつも妹だった。

五つも歳は離れていたけれど、母に関する思い出はやっぱり共通していて、話せば話すほど気持ちが安らぎ、ああだったこうだったと次々とエピソードが思い出され、あっという間に時間が経つのだった。

そんなある日、妹と私は仏間で思い出話をしているうちに、やけにしんみりしてしまった。

どちらかが沈黙したら、どちらかが絶妙な間をとって話を繋げていく、姉妹ならではの会話術が、その日は途切れっ放しになっていた。

各々が頭の中で、堂々巡りの様な母への思いを、繰り返し考えていた。

考えても考えても、引き返す事の出来ない、取り返す事の出来ない、母との日々であった。

ジクジたる思いっていうのはこういう事を言うのではないかと、
苦々しい気持ちを噛みしめながら、お互い畳の上に座っていた。

するとその時に、隣の応接間から唐突に大きな足音がした。

居間にいた父が、応接間を通ってこの仏間にやってくるのだな、と思った。

しかしまあ、なんて大きな足音を立てて。相変わらずデリカシーを欠く行動をする人だ。

場違いなまでに派手な足音が応接間を抜け、仏間への廊下を進んで来たと思うと、その勢いのまま、スパーンと仏間の障子を開けるのだ。

父が一体、母の思い出話をしている娘たちに、わざわざ何か言いに来るほどの、どんな用事があると言うのだ？

お行儀が悪い、と私達だったら叱られる様な障子の開け方をして、どういった了見なのだろう。

妹も私も、背中を丸めて鬱々として畳のへりばかり見ていた姿勢のまま、顔も上げず、父の声を待った。

しかし、何も起こらず、静寂が戻った。

不思議に思った私達が顔を上げて障子を見たのは、ほぼ同時であった。

「音、したよね。」

「足音したよね。」

「それでここバーン、と開いたよね。」

妹と私が何度、顔を見合わせても、障子は数ミリも開いていなかった。

大きな音で、つい今しがた開いたはずなのに。

また別の日は、慶弔休暇を終えて妹が出勤し不在の時に、私が一人で仏間にこもった事があった。

障子をぴったりと閉めて、一人でお仏壇の前に座り、母に思いを巡らせ、鬱々としていた。

どのくらい座っていただろうか、ふと、仏花の花束の中の一本のお花に目が止まった。

きれいな色のお花だな、と思う暇もなく、その一本のお花が、まるで指で弾かれでもした様に、弾けて小さく揺れた。

たった一本だけ。

ああ、ママがやったんだな、と思った。

(あんたにもちゃんと言ったでしょ。)

(パパはああいうやり方しか出来ない人だから、あんたがちゃんとパパの面倒見てあげてって、言ったでしょ。)

母とドライブしながら会話した、あの時の、「私が死ぬのは良いのよ。」の発言を思い出した。

父は私に伝えないだろう、と母はわかっていたという事か。

父はそういうやり方しか出来ない人だから。

母は私にあの時、直接本人から教えてくれていたという事か。

「パパは何て言ってる？」

母は自分の余命について疑いを持ってそう言ったのではなかったという事なのか。

あの時、私に直接伝えてくれていたのか。

一本のお花が弾け、私の心は急に柔らかくなって、本当の事が分かる気がしていた。

ちゃんと、考えて貰っていたんだ。

振り返ってみれば、妹にばかり、母の看病を押し付けてしまった部分は多々あった。

父と私との板挟みで、苦しい思いもさせてしまったのではないか。

妹に対して、恨みがましい気持ちを持つのは間違っている。

素直にそう思った。

すると、また今日も応接間から元気な足音が聞こえて来るのではないかと楽しみになって来たが、とうとう聞こえて来なかった。

「また来るね。ありがとう。」

私はそう言って、自分で障子をそっと開けて、父のいる居間に向かった。

３５孫からのプレゼント

母が亡くなった秋の数ヶ月前、夏の盛りに我が家の末の子供が生まれていた。

いよいよ危ない、というので親戚の者たちが母の病室に次々と詰め、ベッドの周囲をぐるりと囲んでしんみりとしている場面が多くあった様に記憶している。

時には母の身体をマッサージしながら、私も部屋の中の人達と色々と言葉を交わした。

母にはモルヒネが投与されていたから、意識がもうろうとしてわかっていないだろうと、あからさまに母の病の事や、元気だった頃の思い出話をする親戚もいた。

聞いていると思わず感極まって、つい涙があふれて来てしまうのを、母の視界に入らない様に慌ててそっぽを向いて隠すのだが、決まって母はそういう時、素早く私の顔に視線を合わせ、私の心の中を覗き込もうとしている様だった。

生後三ヶ月から保育園生活をしていた末の子も、おばあちゃんにさよならをする為に皆と一緒に病室に詰めた事があった。

ベッドを囲んで、うつらうつらしている母の顔を見ながらポツリポツリ話す。

言葉が途切れて不意にしんみりしてしまったその時、末の子を抱いていた夫が、赤子を横抱きにしていたそのままの姿勢で、両腕を伸ばして母の顔のそばに突き出した。

自然と皆の視線が赤子に集まり、なんともタイミングが良い事に、赤子は身動きをして、にっこりと笑顔を浮かべたのであった。

一同も思わず歓声をあげて、重苦しかった雰囲気が一気に和らいだのは言うまでもない。

「たまちゃんが三人も子供産むから、お母ちゃんはこんなに早く亡くなるんだよ。」

そう言っていた親戚のおじさんがいた。

命のバランスという物があって、生き死ににもちょうど良い塩梅がある、というのがおじさんの持論で、立て続けに生を受けた家には、バランスを取るために、失われる命があるのが当然だと言うのだった。

理解ができず、合点もいかず、反論しようにもあまりにも突拍子のない理論に思えて、話の糸口が見つからないままもやもやしていた私であったが、その時の赤子の、輝くような、屈託のない笑顔を見た時、全てのわだかまりが解けて行く様に感じたのだった。

きっと母の耳にも、皆の明るい笑い声は、心地よくしっかりと届いていた事だろう。

36母の形見

母の葬儀が終わり、忌引が明けて勤務を再開してからも、折に触れて母への思いが募り、様々な場面に際しては、私はいちいち涙に暮れていた。

仕事帰りに保育園にわが子を迎えに行き、二階の保育室に向かう階段を昇りながら、行き交う人もなく自分一人だと感じると、必ず思いを馳せるのは母であった。

半べそ状態でグスグス鼻をすすりながら、ノロノロとお帰りのお支度をする。

帰宅後は、自らの左手の薬指にはめてある、金のシンプルな作りの指輪がおさんどんの最中に目に留まり、じわじわと悲しみの感情が押し寄せる。

一応の母の形見分けという事で、私は母の結婚指輪を貰っていたのだった。

何をどう思ったのか、もっと生きたかったであろう母の、たった五十五年の生涯を、これからは私が引き継ぐのだ。と胸を熱くしていた。

若い身空でふるさとを遠く離れ、夫だけを頼りに、人生の荒波に身を投じた母。

信じようと固く誓った物が、蓋を開けてみると実は何の実態もなく、空虚で掴みどころも無く、頼りないだけでなく、不当に自分の立場を落としめはずかしめるだけの、恐怖と不快感に満ちた生き地獄に過ぎなかったという悲惨な事実を察してから、一体母は何十年、ひたすら耐え忍んで生きながらえていたのだろう。

そんな風に思いを馳せれば馳せるほど、母が気の毒に思えて、母の代わりに私が、これからは幸せに生きなければならない。母の分まで。と強く感じていた。

私が幸せに、生きたい様に生きれば、それが母への供養になると信じていたのだ。

「私はあんたみたいな母親にはならない！」

たしか中学生の頃、思春期の子供の典型の様に、そんな言葉の刃を母に突き付けていた事も思い出していた。

私は自分の思い通りに生きる。誰の指図にも脅しにも屈しない！

母が、大学生になった私に向かって、「女の子だって経済力は絶対に持っていた方がいい。」と、安定した公務員の職業を勧めていた事も、ずるずると芋づる式に思い出された。

自分の置かれた場所がいかに厳しい所でも、ひたすら堪え、耐え忍んでその場所に居続けた母であった。

今の時代であったら、何がなんでも職を得て、或いは福祉の力にすがって、とにかく家を出る、という選択肢が一番有力かつ賢明であると思う。

ただ、時代という大きな縛りと、何より母自身の並外れた忍耐強さとで、跡継ぎ不在の、名家の長男宅の嫁という、不名誉と言うのもはばかられる位の、ナンセンスなレッテルを貼られるがままに、鎌倉の薄暗い谷戸の入口の家に幽閉されていたのだ。

それほど辛い立場に置かれても、たったの一度も、決して指輪を外そうとしなかった母。

母の気持ちを少しは体感できるのかも知れないという期待もあって、私は普段自分の結婚指輪もはめていない左手に、朝も夜も母の形見を着けて生活をしていた。

37お料理の腕前

母は生前、連れ合いに先立たれた義理の父の家に、長男家族として同居しなければならなくなった際、お台所に少し手を加えて、ガスオーブンを導入したいという希望を述べた様だ。

いつも器用に、様々な手作り料理をたくさん作っていた母だった。

平屋だった祖父の家に二階部分が増築されて、子供部屋と客間とが隣り合わせに配置された。

階下では、御手洗を水洗にして、お風呂場をリニューアルした他は、なんと言っても業務用ばりの大型ガスオーブンがデーンとお台所に備え付けられた事が画期的だった。

母は、水を得た魚の様に、日々オーブンの扉を威勢よく開け閉めしては、魔法使いよろしく色々なご馳走を次々と作り出していた。

「ガスだから火力が全然違うのよ！出来上がりも全く変わって来るから。」

鎌倉梶原のお友達のお宅にお呼ばれで出かけ、お友達のお母様が作って食べさせて下さったチキンのお料理がすごく美味しかった、と報告すると、数日後には、オーブンの中でチキンにこんがりと程よくお化粧を施させ、満を持してホカホカで登場させるなんて事も難なくやってのけた母であった。

バターロールを作っている時は、パン生地を発酵中のイースト菌の良い香りがこたつの中に充満し、こたつの温もりが部屋中に満ちて行くように感じて、心までほっこり温まる様だった。

生地を伸ばしてひとつひとつクルクルと巻き上げロールパンの形にして、天板の上に巻き終わりを下にして並べて行く。

オーブンに入れると、焼き上がりが近づくに連れ、なんとも香ばしい香りがしてウキウキしたものだ。

口に運ぶと、止まらない。もう一個、もうひとつ、と手が伸びてしまう程の噛みごたえと、芳醇な小麦粉とバターの風味であった。

また、学校から帰って来ると、我が家がさながら古民家カフェの体を示している事も往々にしてあった。

大き目の立派なシュークリームが、カスタードクリームを溢れんばかりに湛えて、いちごの帽子を被り、粉砂糖をふんわりとまとっている。

そんなシュークリーム達が、一見しただけでは数え切れないくらいに、ズラリと並んでいるのだ。

ホクホクとご相伴にあずかる放蕩娘の私は、多分これは当たり前の出来事では無いだろう、などと、美味を楽しむのと裏腹に、多少後ろめたく感じているところがあった。

こんなにしてもらえる子は、そんなにいるものじゃないだろう。

父も母も健康で、経済的にも不自由が無い。仕事に追われるのみの日々を強いられる事無く、好きなお料理やお菓子作りを極める事が許されている我が母だからこそ、こんなに美味しい手作りスイーツにあり付ける私がいるのだ。

私は、果たしてこんなに恵まれた境遇に甘んじて生を営む資格はあるのだろうか？

（男の子じゃないのに？）

そんな時、通奏低音の如く心の奥底で決まって聴こえて来る声だった。

もし私が男の子だったら、よっしゃこの家を立派に継いで嫁さん貰って、次世代にも繋ぐで～！

と、堂々と、三個目のシュークリームを掴んで頬張る事が出来たのではないかなあ？

いつからそんないじけた考えに支配されていたのか記憶にはないが、小さい頃から少しずつ、粉砂糖の雪のように静かに積もり積もっていた物なのかも知れなかった。

38三人の外孫

一人目の子供が産まれた後、私は母に言った。

「女の子では困るって言われた。」

二人目の子供が産まれた時、母は私に言った。

「産後で大変だから、おばあちゃんのお葬式には顔出さなくて良いよ。」

三人目の子供が産まれた後、母が私に言った。

「あんた、外孫ばっかり三人も産んでから。」

私は、嫁いだ先の苗字を名乗る子供を三人授かった事には違いなかった。

元々子供が好きな私は、乳児期や幼児期といった我が子達の世話や相手をする事が楽しく、充実した日々を送っていた。

第一子のお披露目に、夫の実家を訪れた際、義父が私に言った。

「女の子では困るんじゃ。男の子をあと二人、お願いします。」

私達夫婦の結婚披露宴での挨拶で、ほろ酔い気分で「大日本帝国万歳。」発言をした、海軍幹部の軍人家庭の長男として育まれた義父であった。

富国強兵の精神をその身に叩き込まれ、一家の長男がその精神を脈々と受け継ぐべし。まさにその生き証人だ。

そんな人物に頼まれたからという事で従った訳ではないが、たまたまその後、男の子を二人授かった我々夫婦であった。

さて、負けず嫌いで鼻っ柱の強い私が、腕の中の長女をことさらに強く抱きしめながら、「では女の子は必要ないって言う事ですね！」と義父に食ってかかったのは言うまでもない。

その場は酒の席で、笑って流された訳だったが、私の心には、大きく暗い影を落とした出来事であった。

一方、私の父方の祖母は、長く認知症を患い、入院生活を送っていた。

実家の母が、面会や事務手続き等の面倒を見ていたのだが、私が第二子を出産後まもなく祖母が息を引き取ったとの事で、母が電話をくれたのだった。

父方の親戚に失礼に当たるとは言えど、産後まもない私の身を気遣って、葬儀への参列を猶予してくれた母だった。

男の子の誕生は、夫の実家ばかりでなく、男子に恵まれなかった私の実家にとっても喜ばしい物であったと見られ、母は自らの闘病の合間に無理をしながら、男の孫の顔を見に来ては珍しそうにしていた。

母の闘病を気遣い、私は長男誕生後、数日経ってから母の都合に合わせて、無事の出産報告をしたのだった。

「あんた、いつの間にか知らんうちに産まれて～。」と赤子に嬉しそうに話しかけていた母だった。

私は、小さな子供や赤ちゃんに囲まれ、忙しい中にも、日々たくさんの幸せを見つけながら暮らしていた。

ディズニーシリーズの CD をかけて子供たちと一緒に聴きながら、遊んだり、家事をしたりして過ごす。

子供たちの些細な行動の中にも、可愛らしさや健気さ、あどけなさを見出し、子育ての喜びに満ちた、人生でも最高ではないかと思われる時期を過ごしていた。

笑顔と歓声と元気に溢れ、泣きわめく声や怒号さえ生活のアクセントとなって、心豊かな日々の暮らしを織り成していた。

それだけに、電話越しの母の言葉には驚愕した。

そんな風に思われていたとは。

無事に三人の孫を産んで、元気に子育てをして、時には顔を見せに連れて行って、てっきり両親共に手放しで喜んでくれている物とばかり、信じ込んでいた。

「外孫」という響きは、もはや私にとっては、何の意味も成さない、空虚な音声でしかないのだが、母にとっては、わざわざ娘に電話をかけて、育児で忙しくしている手を止めさせてまで、一言言ってやらないと気が済まない種類の、特別な意味を持つ言葉であったという事であろうか。

その言葉のバックボーンには、どんな景色が広がっているのだろう？

あの時義父の言葉が私の心に暗い影を落とした出来事と、似た様な種類の光景なのだろうか？

どれだけ考えても正解には辿り着けないと漠然とわかっていながら、我が子達の無邪気な笑顔の向こうに、母の思いを探ろうと足掻いている自分がいる事を感じていた。

39リングを捨てた夜

その日、私はいつもの様に、夕食後の食器洗いを済ませた。

残菜をまとめてシンクの隅の三角コーナーに入れ、水を切る。

明日の朝、生ゴミの袋に入れてゴミ収集所に持って行くだけの状態だ。

大根の皮やキャベツの芯、人参のしっぽなんかが放り込まれた生ゴミの様子を、特別な感慨を持って眺めた訳ではなかった。

迷いや戸惑いや躊躇などによる、何らかの意味を持った、沈黙とも間とも呼べる様な物はそこには全く無く、私はまるで梅干しの種を舌の先からつまんで無造作に投げ込むように、左手の薬指からリングを外して捨てた。

雑然とした残菜のてっぺんに、古びたゴールドのリングがひとつ乗っているのを、少しの間注視して、袋を閉じた。

古くなって輝きが失われ、もはやゴールドとは言い難い、黄土色にも近い鈍い色合いになっていたそれは、残菜と共に存在していてもちっとも違和感を感じさせなかった。

忙しく子供達の入浴を済ませ、洗濯をしたら手早く干して夜風に晒すべくベランダにせわしなく持ち出す。

保育園の荷物を整え、子供達を寝かし付ける行動に移りながら、私はふと、妙に息が楽な事に気が付いた。

意識して深呼吸をしているつもりはなかったが、何故だか呼吸のひとつひとつが、自然と深くなって随分と楽に出来ている気がする。

思えば気持ちも何故だか軽やかだ。

せいせいした様な気持ちだった。

余計な荷物を手放した様な爽快感と言っても当てはまるかも知れなかった。

40指輪が増えた日

一歳になったばかりの孫娘の元気な泣き声が、唐突に病棟に響き渡った。

ベッドでうつらうつらしていた私は、ハッとして目を開けた。

孫娘を脇に抱えて、入院患者達の迷惑にならない様に足早に廊下を歩き去って行く娘の後ろ姿と、イラついているであろう娘の気持ちを代弁するがごとき高らかに響く靴音が残った。

私の孫娘なのであった。

母から譲り受けた形見を、いとも簡単に捨て去ったあの日から、怒涛の如く時は移ろい、私は第一子である娘が授かった孫娘を愛でて暮らす、おばあちゃんとなっていた。

そして、母が発病したのとほぼ変わらない年齢で、ガンという病を得て、治療を受けていたのだった。

抗がん剤による化学治療、放射線照射、骨髄移植等の、内容も密度も濃い最先端治療を八ヶ月間にわたって受けたのだ。

治療の合併症により、集中治療室で二回ほど息を引き取りかけたが、その二回目の時に、母と、そして母を追う様にして他界していた父とが、二人揃って私の所に現れて、まだこの世でやる事がある、今頑張らないとダメだと言って、叱りつけてくれたのだった。

主治医を持って奇跡と言わせしめた生還を果たした私であった。

きつい治療で身体的に厳しい状況が続き、最早この世に未練は何一つ無く、少しでも早く楽になりたいと、天国の両親に迎えに来てくれる様念じていた私だったが、十数年前にキッチンで無造作に捨て去った母の金の指輪に関しても、後悔の念ひとつ抱いてはいなかった。

苦痛に耐え兼ねる娘を目の当たりにすれば、きっと救いの手を延べてくれるはずだと踏んでいた両親から、まさかの叱咤激励を受けて、この世に戻って来た私の頭に、金色の指輪のイメージが浮かび上がっていた。

病に倒れる直前、私はお揃いの金の指輪を三つ、ハワイアンジュエリーのお店で注文していた。

長女と、孫娘と、そして私の分だった。

お揃いのピンクゴールドの指輪を、私はクリスマスプレゼントとして注文した。

お店に受け取りに行った時、三つ並んだゴールドの指輪を見て、何故だか目頭が熱くなっていたのを覚えている。

急な入院で、実際に娘親子に手渡すのは、病室でという運びになってしまった。

孫娘はまだ小さいので、ベビーリングの可愛いサイズ感の物である。

各々リングを左手の薬指にはめて、手を並べて写真に収めた。

ゴールドに繊細な彫りが施されているリングで、光をキラキラと反射させてとてもゴージャスな雰囲気で、見ていて飽きない。

孫娘はキラキラがいたく気に入って、思わず口の中に入れて味わってみたいという衝動に駆られたのか、親の目を盗んでパクリと口に含み、その後危うく喉に詰まらせかけるというインシデント案件があったのだ。

慌てた娘が孫娘の口をこじ開け、無事にベビーリングを取り出した際の、驚いて大泣きをする孫娘の声でうたた寝から覚めたという、冒頭のエピソードに繋がる訳である。

（みちこばあちゃんと同じ様に、ママも50台半ばで死んじゃうのかな。）

娘も息子たちもそんな風に感じたそうだったが、私は帰って来た。

心底辛い時、両親に助けを求める事になるとは、自分自身驚きであったが、同時に至極当然の事の様にも思われた。

そして両親によって、この世へ返された私なのであった。

「たーちゃん！」

「これから楽しい事がたくさんあるんだから、今頑張らなくちゃダメだ！」

私は今、母が亡くなった年齢を超えて、生きている。

そんな私が想うのは、ああ、親って死んでも、有り難いなあ。という事である。

金の指輪が新たに増えた事を、きっと私と同じ様に、母も喜んでいる事だろう。と思う。

母の人生を生き直そうとしていた過去の私。

しかし、自分の人生を生きるべきなのでは、と漠然と感じ、潔く指輪を捨てたのであった。

こうして新たな指輪を、娘達と一緒になって愛でるようになるとは、当時の私も想像だにしていなかった。

つまり私の選択は、間違っていなかったのだ。

人にたくさん傷付けられ、多くの人を傷付けて来たが、自分を信じて道を切り開く生き方が、実は正しかったのだという事に気付くのに、優に六十年という年月が必要だったという事なのだった。

壮絶な人生を送った母だったが、きっと亡くなる寸前には、自分自身の人生を愛おしくそっと抱きしめて逝ったのだろう。

母から受け継いで、今では三つになった金の指輪の絆に支えられながら、私も最期の時には笑顔で逝ける様に、心穏やかに生きて行こうと考えている。

あとがき

瀬戸内の師走の候には珍しく、雪の降る冷え込んだ日に、私は産まれた。

穏やかな海と、趣きのある山々に囲まれた、あの温かいお家の座敷で、お産婆さんに取り上げられ、元気に産声をあげたのだ。

くみ子姉ちゃんも知恵ちゃんも、赤子が産湯をつかうのに興味津々で、二人揃って監督さんの様に赤子を見守っていたそうだ。

実に63年前の出来事なのであり、二人のいとこ達も親となり、自分がそうして貰って来た様に、それぞれの子供たちに愛情をかけて育て、見返りを求めない愛という物の存在を自らの中に見出し、実践し、実感をしているだろう事と考える。

例に漏れず、私自身もこの世に子供達を産み落とし、時には嵐や竜巻の様な人生の荒波に翻弄されながら、命からがら生き長らえて来た。

自身の子育てにあたっては、多分に自身の子供時代の経験や親との関係性が、良くも悪くも影響力を持って関わって来るであろう事は想像していた訳だが、実際の生活の場では、ひとつひとつの場面に接した際の自分の捉え方や具体的な対応は、実に無意識の種類の物なのであり、それは身体の芯にまで染み付いてしまっているくらいの、自分に取っては当たり前の道理であったのだった。

ところが、自分の意図する所とは全く別の次元での、子供との軋轢、義理の親との不和、そして夫との衝突を経て、私は然るべき医療機関を訪ね、医師に相談し、複雑性 PTSD という診断を受けた。

診断を下される少し前から、何かに突き動かされる様に執筆を始めていた本作品であるが、いつの頃からか、私は自身の母との関係を、見つめ直したいという気持ちを持ち始めていたのだと気付かされた。

主に幼少の時代に、長期間に渡って、心理的、身体的な虐待を受け続けた事により、何十年も経過してから、心身に悪影響が出現するタイプの疾患であるという事であった。

子供は、全面的に大人を頼らなければ、生命の維持において保証されない。

にもかかわらず、子供が到底知りえぬ部分で、虐待性を秘めた大人に関わり続ける事を強いられた場合は、果たして子供の心身は健全に育成されるのであろうか？

母が亡くなった年齢を過ぎて、自身も子育てを経験して、母を一人の人間として冷静に観察する時、私は心の奥底に、深い傷を負っている事に気付いたのだった。

そしてその傷の原因として、大きく絡んでいるであろう、母の存在という物に、一度きちんと向き合って、自分の中で折り合いを付ける事が必要なのだと悟った。

本作品は、自分自身の為だけに、自分への鎮魂歌の様な意味合いで、自身の再生を願って、大切に綴った物語である。

それと同時に、愛しい、愛すべく、最愛の母の魂への、レクイエムにもなっていく事だろう。

何故なら、母と子はいつまでも、一心同体なのだから。

私は今や、母の人生を生き直すのではなく、自分自身の人生を生き直そう。

一体どんな展開が待ち受けているのか。とても楽しみだ。

母の享年を超えて、思いがけずも生き延びた私は、病と向き合った日々の心と身体の記録を記させて貰った。

宜しければ、ご参照くださると幸いである。

Ameba Blog「たーちゃんのズッコケ闘病記」
https://ameblo.jp/ta-tyan777

2025年　4月吉日